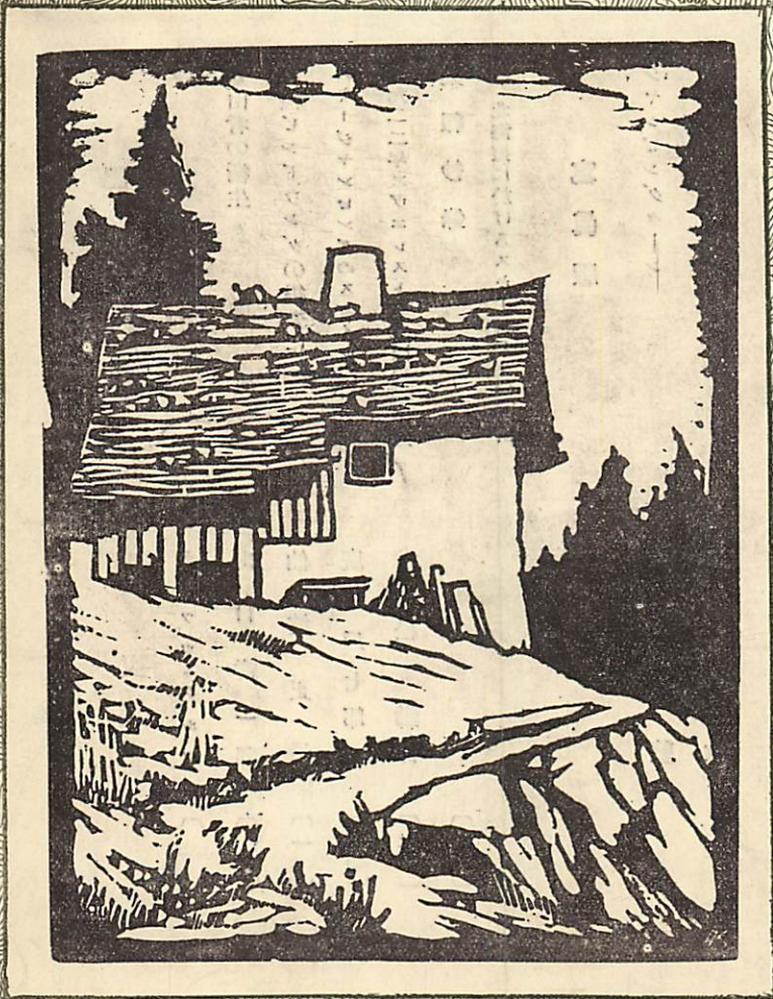


山とスキー

第四十三號



札幌山とスキーの會發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年十月三十日印刷精本
大正十三年十一月一日發行（一日發行）

次目號三十四第

記事

詩

登山者の衛生

各種ビンドウングの得失に就て

スキージャンピングのスタイル

一九二二年エッセレスト第三回登攀抄録

彙報抄録

北海道に於けるスキー材とその蓄積

寫眞版

ジャンピングターイン

クリスチャニヤ

クリッツ・ケルツ

〔一〕

山口 壽一 譯

〔二〕

仙波 正雄

〔三〕

廣田 戸七郎 譯

〔三〇〕

赤松 勳 譯

〔三四〕

〔四一〕

長谷川 敦

長谷川 敦



デヤンピングターン

長谷川 敦

苦しかった登り それにもましてつらい

谷への岩づたひ。

いま 潤やかな鞍部から 私は

見をさめに峯を仰ぐ。

最後の眺め！ 行くては艱く

あゆみは疲れるであらふか。

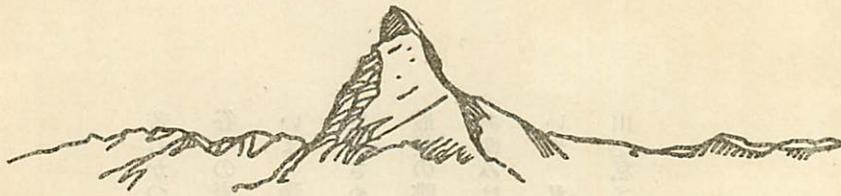
いや 私は清曉の氣分で

山を私と共に 伴ひ行く。

登山者の 詩集

—フリッツ・クルツ—

Dr. M. von W.



登山者の衛生

Dr. M. Von Wyss

山口 壽 一 譯

我々の健康と生命に對して障害を受けるに就いては、その人の肉體的（並に精神的）の狀態が大いに決定的の意味を有するのである。或人は身に少しの怪我もなく、多人數中の不幸から逃れる事が出来るけれども、彼の近くの者は何等體に傷を負はなくても非常な神經攪亂に陥る。又流行病は何時も一部の人々のみを襲ふけれども、他の所では保菌者が居ても何でもないのである。此の二例は頑強な肉體的及び精神的の體質の人は、それより劣つて居る體質の人の到底耐へ得ない危険に打勝ち得る事を示して居る。

衛生學の目的はこの外界のあらゆる障害に對する抵抗力を、人體に附與すに在るのである。以下登山者が登山に際してその人の能力を揮ふ前後又は揮ひつゝある最中に於て、その苦勞に伴つて来る種々の障害に安全に抵抗する爲のみならず、健康の増進を期待し得る爲に注意すべき規則を述べやうと思ふ。但し私は、登山者なるものは、フューラーの有無

に關せず、自己の肉體を精神によつて難關を切抜け得る人を指し、他人の力や世話で山に登るやうな人を意味しないのである。

先づ基本的に、身體の機能に影響を及ぼす種々の作用を述べて見やう。

他のスポーツでも同じことであるが、登山も平常の生活とは大いに趣が異り、又仕事が非常に増加せられて居る。そして仕事の増加に依つて、より大なる體成分の消耗とその速やかなる補充を必要とする。即ち新陳代謝の促進を來し、體の液狀成分には多くの分解産物が生じ之を體外に除かんと努める。その結果循環器及び排泄器に腎臟、肝臟、心臓、汗腺が機能を高める。之は脈搏と呼吸の増加及び深くなる事、及び發汗の甚しくなる事に依つて知られる。登山以外の種々のスポーツ殊に競走の練習は過激に體力を使ひ易いものであるが、登山者は體力を自分の現在の體力相應に使用する事が出来る。レコードに捉はれ、無分別に何等の顧慮もせぬ事や、旅行者の體力を何等考へやうこしないフューラーの無意味な速さは、餘りに偏せる考へに云ふべきである。

今日に於て飛行機や登山鐵道のみで經驗する事であるが、高さの動物體に及ぼす影響は極めて重大なるものがある。徒歩で登る人は之に反して徐々に高所に適應し得るの利點を持つて居る。高い程空氣は稀薄となり、固體成分は勿論減少するし、空氣は純粹となる。呼吸は深く激しく成り心臓の機能は高められ、酸素の欠亡を調節する。注意深い人は血壓の高進と腎臟の機能の減少した事に氣が附くであらう。又高所の氣候の影響を受けると赤血球が増加する。之に相應した病氣即ち肺病、貧血症の治療にこの作用が廣く應用せられるのである。

登山者は殆ど何時も營養が幾分悪くなるこいふ事を念頭に置かなければならぬ。登山中體に營養分を與へる量は平生の供給量よりは不充分であり、勿論營養消費量の増加ある時に然うであるから體は身體中に貯へてある營養貯藏物を使用しなければならぬ。

寒暖及び光の生體に及ぼす影響は屢々重大なるものである。血液循環の目的は、體の各所に營養分を配布するのみではない。體温の調節も重要であつて、血液は體内で湯を沸して居るやうなものである。温度の變化は神経系統の影響によつて次の如き平衡的現象を示す。即ち寒冷なる際には體表面の血管は收縮し、皮膚は蒼白となり、血液は體の深部の諸内臓器管に流入して、其處の温度を高める。温暖なる際には、反對に體表面の血管は擴張し、皮膚は赤味を帶び、發汗が盛ん

となる。輻射と蒸發に依り體温は體外に放散し、體温の高まり過ぎるのを防ぐのである。上記のやうな寒暖の影響が永續した時、又は體がその目的に對し不適當の時には、此の體温調節は無効となり、凍傷、日射病等に罹るのである。

高く登れば登る程、大氣に吸収せらるゝ紫外線の大きな作用が、益々高まつて、光線の影響はより激しくなる。即ち高い場所程光線を吸収する空氣層が薄くなる爲め、光線の影響は益々強烈なるのである。光線は露出せる皮膚に炎症や氷河熱を起し、平生掩つて置く部分程強くやられる。眼は此の光線には特に鋭敏であるので、保護を加へぬとやはり炎症を起し、雪眼を惹起するに至る。體が強く廣い面に互つて照り付けられる時は、その結果發熱し、又非常なる全身病的感が生ずる。そして注意すべき事は、曇天でも此等の障害が起り、霧がかゝつて居る時は一層強く起る。又直ちに起らずとも一定時經過した後起つたのに氣が付く事である。

概括的に、登山中には身體構成成分が大いに消耗せられ、特に循環器と呼吸器、即ち心臟と肺臟及び諸種の新陳代謝に役立つ内臟器管が強く使役される。我々は確言してよい。健康な人には、個々の内臟器管全體としての身體が、要求に應じて直ちに活動を開始し得る貯藏力を有して居て之が使用せられるのである。この貯藏力は個人に依り大差あつて、又無限に有るものではない。そしてこの貯藏力が不充分となつて來ると、その徴候として疲勞が現はれて來る。即ち歩は極めて緩慢となり、ピツケルにも力が籠らなくなり、それを握る手は最早體をピツケルに引き付ける力を失つてしまふ。腓脛が始まり、歩調は不確實となり、呼吸も重苦しく、心臟の鼓動が氣に付いて來る。そして元氣は沮喪し、刺戟に對する感應度は抑止せられる。休息の要求が益々増し、判斷力が鈍り、困難と危険に對する推測が最早不正確となるのである。かくの如く疲勞は徐々に極限に進んで來る。即ち四肢は意の如く動かす無感覺となり、如何ともし難い睡眠欲が襲來してくる。之等は全て體の貯藏力即ち耐久力の消失によるのであつて、此時には視覺と聽覺の誤りが頻繁となる。

疲勞は身體が安靜と消費物質の補充とを必要とする事を示す爲に現はれて來る現象であつて、全く自然的で又有用な現象である。そして休息に依り非常な愉快を感じる。丁度重病患者がその恢復期に於て新生の喜びを感じるやうに、確かに生れ變つたやうな氣持となるのである。

山岳病の實存するや否やに就いて、數年前或新聞記事論說中に述べられてあつたが、臨床醫家とアルピニストは山岳病の存在を否定し、科學者は肯定し問題とせられた。山岳病の原因に關しては種々の説が陳べられて居る。Dr. Thomas 氏に

依れば、酸素或は炭酸瓦斯の欠亡、新陳代謝産物の排泄不充分に依る中毒が原因すと云はれて居る。

山岳病の症状は心悸、不快、衰弱感、眩暈、昏迷等である。之等の現象は約言すれば略ぼ、疲勞に於けると同様に、それに相當する努力が拂はれて居なくても起り得るのである。實際かゝる現象は、突然山に入った外見上健康の人例へば治療客や山岳兵にも見られる。然し其等の人を注意して診るに、何所かに不十分な點の有ることが證明せられる。即ち貧血、心筋薄弱、動脈石灰沈着や過度の勞働等がそれである。故に此等の人の内臓器管は高所の氣候に於ての仕事を充分爲す事が出來ず、更に登山なる努力が加はつて、此等の人は直ちに山岳病に罹ることとなるのである。ベルグヴェンデルングは種々の病的欠陥を精確に診斷し得る事は、醫師の聽診器以上であるとも考へられる。

充分の熟考なくして登山を志す事は、不健康な人に取つては全く冒險的の事であつて、此の結果は種々の事實に依つて裏書せられて居る。一九〇三年より一九二二年に至る一〇年間のS.A.C.の不幸事件の統計に依れば、アルペンに於てその死因としては大抵不充分なる身体の性質が原因となつて居る。即ち虚脱、過勞、心臓衰弱、卒中及び寒氣の爲の死が四二例、虚脱、發作的の衰弱、不快及び卒中に依る墜落の爲の死が三四例である。そして興味ある事は之等の事件は、その前夜歸り明したとか、露營した時、又は痙攣に依る墜落の際、登攀を途中で斷念した時に起つて居るのである。此統計に依ると事件も年に依つて差異があり、又常に完全に記録せられてもないが、唯致命的の事件だけが擧げられて居るのみである。勿論生殘者が無くて、事件の顛末を説明し得ない時は、その事件は其儘となつて居り、又單獨の登山者の不幸も數多いのであるが、私はこの原因不明の事件にも、發作的の眩暈、心臓衰弱、不快等が主なる原因を爲して居るものと固く信ずる。

此等の觀察と經驗より得たる事實より、容易に實際的の斷定を下す事が出来る。自己を識る即ち自己の健康狀態を識ると云ふ事が、未熟の登山者に對する第一の原則であらう。自己の体力の充分なるや否やをも験せず、山に入り彼の同伴者に迄危険を及ぼすのは、少くも不注意なる行爲と云はねばならぬ。健康及び内臓器官が思ふまゝに働き得る事は絶對に必要であつて、誰が實際に登山に不適であるかを見廻すならば、その様な人は澤山居らるゝのである。

若年者は高山登攀には貯藏力も不充分で、内臓器管も均等なる發達を遂げて居ない。又老年者は耐久力も使ひ盡してしまつて居る事があり、呼吸器、循環器も屢々障害を受けて居る。一般に肺と心臓及び血管の全く健康でない人は、登山を爲ない方がよい。又新陳代謝の障害を惹起するやうな疾患又は先天的の病氣のある者、即ち腎臓及び肝臓の疾患、貧血

症、脂肪多過症、糖尿病又は高度の神経質の者も同じく、登山を禁止すべきである。若し此等の病氣の一つが既に自分にある時には、その患者は登山の念を起すやうな事はない。然しその初期にあつては屢々その病氣を知らずに居り、又慣れない人は多くの者が病氣に悩んで居るやうに、何か病氣をひどく持つて居ると考へて何等の疑も挾めないものである。然らば初心の登山者は醫師の許に診斷を乞ひ、登山者としての健康診斷書を買ふべきかと云ふに、かゝる必要も認められない。即ち一般の原則として他の見地より、初めは充分の節度を保ち、後年に徐々ミ度を高めて、中位の山岳フオルアルペン—高連山、と云ふ風に進んで行く方法が必要とせられて居る。此の要求は衛生上の見地より特に價値あることである。新聞に誇めて書いて貰ひたい爲に、自分の十四歳の子供をマツターホルンに登らせるやうな父親は、自分の子孫を害すると何等變りがない。かゝる人よりは親の權利を剝奪して然るべきである。同様に全級の生徒に重いルツクを背負はせて各級生徒の体力をも考へずに強行軍を爲せる事も避けなければならない。

健康体やその各内臓器管でも、其の爲す仕事を次第に増加せしむる事に依つて、よく最高の仕事を爲し得るやうに適應せしむる事が出来る。高所の氣候、酷烈なる暴風或は食物の欠亡に依つて起る全ての事件には、この徐々に慣れると云ふ事に依つてのみ抵抗する事が出来る。この練習及び氣候に慣れるのも、技術の修得と同様に長年月を要する事である。かくの如く徐々に、目的を忘れずにやつて初めて、本來虚弱で病氣になり勝ちの身体を丈夫にし、且健康体ならしむる事が出来るのであつて、又一方に於ては今迄持つて居た病氣を發見し、其に對して醫師以上に適當なる手段に依つて病氣を除き去し得るのである。此問題に對しては山岳兵の國境守備勤務が幾多の證據を示して居る。大なる筋肉の力はアルピニストに必要なものには違ひないが、絶對的にその力が大でなければならぬとは限らぬ。優れたる登山家の大多數は力量の大なる人ではなく、寧ろ内臓一様に完全に發達し居る事、練習に依つて獲たる健康、外界の影響に對して抵抗力の強きこと及び堅固なる意志が重要なのである。

比較的短時間でも、熱心に速やかに程度を高めて練習すれば、よく最高の仕事にも耐え得るに至る事は確かである。然しかゝる練習過度の際には、所謂全盛時代が短期間續くであらうが、直きに心臓過勞が原因となつて、結局その努力は水泡に歸してしまふのである。

總ての人が一年を通じて、絶えず登山の練習を爲す事は不可能である。然し或程度までは内臓器管は絶えず働かねばな

らない。そして一度獲た能力は再び失ふやうではいけない。それで坐業者は補助手段として利益ある方法を選ばなければならぬ。即ち行軍、体操等は登攀に必要な力を作る事となり、冷水浴等は暴風に對する抵抗力を獲せしめてくれる。餘り頻繁に温浴するのは反つて寒氣に對し過敏なる恐れがある。

上述の如く注意しても、新たに登山季節が始まる時には、毎年アルピニストの体力は前年の登山季節の終りよりも著しく弱くなつて居る。休暇が来る頃には、身体が疲勞し自分の職業で大部神經質になつて居る。それで多くの人は山中で身心を休養せんとして居るのである。其時種別の第二の疲勞が生じた爲に、之が前よりの疲勞と相重るが如き事は無きやうに注意せねばならぬ。先づ充分に休養してから、軽い程度の仕事を繰返して始めるべきで、そして段々と程度を高めて行くのである。即ち我々は毎年我々の能力を驗する必要がある。多くの登山家は毎年自分は老ひつゝあるのであると云ふ事を忘れて居るやうである。老年になればなる程、周到なる練習が必要なるものである。

旅行中の規準として、各人は自分自身のみならず、その旅行指揮者又はフューラーが各同行者に對して、確實に適應態度を取り得るやうになつて居る事が、絶対に必要な事である。指揮者たるべき者は、その將來爲さるべき努力に對し、その安全なるか或は可能なるかを充分注意しなければならぬ。よく雇主が爲す様に、隠して有邪無邪に葬るが如きは決して取らざる所である。困難の目前に迫つて居るのを知りながら、登山を躊躇し或は氣の進まぬ人を説得して連れて行かうとする人は、大なる責任を負ふべきである。數多くの不幸事件は、偶然の友人や「一度一所に参りませう」位の知り合ひを同伴する事等から起つて居る。

各旅行者の瞬間的態度と云ふものは重要なものであつて、前夜踊り明かしたり飲み通したやうな人と同行するのは結局、自殺を意味して居るのである。困難な旅行の前には、思ひ切つて安眠をしなければならぬ。不幸にして我々もクラブヒユツテでよく眠れない事が屢々あるが、この主なる原因は、充分に氣候に慣れない爲であつて、谷から急に高い所に登ると云ふ事が、初めは多くの人々の不眠の原因となるのである。又衣服を着けたまま慣れない睡眠を爲したり、寝る前に餘り茶やコーヒーを攝る事にも因る。或人は晩に餘り肉を多く食ふと安眠が出来ないといふ事である。

又多くのクラブヒユツテでは、必ず驅蟲粉を用ひなければならぬ。悠々と小屋の中ばかりで騒いで居る南京蟲等の害を避けるには、一層強力な藥劑が必要である。又良習慣を作り、興奮性飲料を避け、ヒユツテの整頓に注意を拂ふ事は餘

り推奨し得ない睡眠劑の使用を不要ならしめてくれることを忘れてはならない。

服装に就いては、汗腺は分解物質を旺んに排泄し腎臓の働きを助けるものであつて、その汗の發散を妨げぬ爲には衣類の注意が必要となるのである。之には羊毛製の襯衣が最もよい。彈性護膜、紙、革の如き空氣や水分を通さぬ物は、寒風に對しては優れた防禦物たるを失はないが、體を激しく動かす時には、汗の發散を妨げる爲め氣分が悪くなり易い。又衣服は體の何所をも壓迫、禁縛するやうではいけない。身體殊に四肢を縛する事は、血行の妨害となり、局所的疲勞の徵候（痙攣）が現はれ、凍傷の危険が増加する事になる。それで此の事と諾威のスキー服とに就いて考へると、ズボンは短いのが好いか長いのが好いかとの議論が起るのであるが、近頃は第一の條件たる壓迫と云ふ事に依つて問題の解決が着いて居る即ち短ズボンも長靴下も壓迫を及ぼさぬ物は無いのであるから、短ズボンは論ずる餘地が無いと思ふ。靴下留めや脚絆は足を締めないやうにして用ひなければならぬ。この點より見て所謂ズボン覆ひは不適當な物で、互に近づき合つて直に臍鞘炎を起し易いものである。

靴も亦餘り壓迫しないものを用ふべく、之は足指の凍傷を起すことになるからである。即ち靴下を二足重ねて穿き得る位のものを選ぶのがよい。ルツクサツクも肩の神經や血管を壓迫せぬやうに、充分廣い革紐を着けなければならぬ。

雪眼鏡は眼の保護に缺くべからざる物で、その目的は主に紫外線を妨ぐにあるのであるから、黒硝子のよりは、光線の吸收も充分で且つ視力をも餘り害する事のない黄色のものを選んだ方が宜しい。生絲製のマスクや塗料を用ひて、顔のグレッチャーブランドを防ぐ可きか否かは、各個人の趣味に關する事柄であるが、旅行して顔を眞黒にして歸るのも仲々重要な事である。

帽子を用ふるのは、殆ど舊式の事でもあるが、又幾分は理由のある事である。帽子は頭部の蒸發妨害、壓迫に依り、又皮膚の營養を害して、よく老人の禿頭を見るのである。然し甚しき寒氣と強い光線に照さるゝ事に對して、殊に氷や雪の上ではその保護の爲めに適當な帽子が役立つてくれる。

山岳中に於ては、清潔と云ふ事には餘り行届いた注意は拂へない。山中の小川や湖で水浴を爲す時には、豫め體を冷して血壓の急激なる變化を來さぬやうにしてやれば、健康なる人ならば何等の害も受ける事はない。心臟の弱い者や動脈硬化症の傾向ある人は、特に此の事に注意しなければならぬ。又足を清潔に爲なければ、足の保護も充分にするわけにはい

かぬ。足は身體中最も發汗の多い部分であるから、多少でも水分の透らぬ靴は汗の蒸散を可成に妨げる事になる。猶負傷せる足で登山するのは、折角の悦樂をも甚だ苦しいものとしてしまふ。それで足をよく洗ひ、靴下を屢々取換えるのが最良策である。陸軍でやつてゐるやうに、足にフオルマリンを塗るのは、アルビニストには餘り必要ではない。

食物は極めて重要な問題である。最良の糧食は登山者自身の身につけて居るもの、即ちその人の營養状態の良好てふ事である。之は又脂肪ばかりでなく、質素な習慣が大切である。美食家や平常大食の者は結局食糧運搬者が一所に行かねば満足する事が出来ないのである。

旅行中は天抵食欲は減退するものである。それで登山家は自己の體の貯藏物を消費し得るやうになつて居なければならぬ。一體アルビニストの攝る食物の種類と量程、個人的要求の甚だ異なるものはない。即ち之等に對する要求が極めて少い人もある。概して軍隊は之等に對して要求が大きいので、スバーツやスープ等が無くては山中行軍は出来ないものと信ぜられて居る。勿論一部の人は殆ど常に營養が悪くなつて、彼等の負ふて居る全然價値のない負擔のみが大となるのである。

平常食へ慣れて居る物と餘り遠ざからぬのが、最も適當である。食物の急激なる變化は軽い消化障害を來す。此の點でアルビニストは自己に適する食物を充分に注意し、識りおくべきである。糖果の如きは非常食糧として、又短日の旅行には用ひられるが、永續して用ふる時には屢々厭きが來るものである。そうかみ云ふて勿論無價値では無い事を信じなければならぬ。若し科學の力がツロボンやヒギアマの如き錠劑や粉末のもので、理論的に算出せる營養價に依つて、登山者を養ひ得るとしたならば、口や消化器は實際には充分満足は出来ない事になるのである。脂肪は體温發生に極めて役立つもので、平常は好まぬ人も、寒い時には大いに脂肪を攝取するがよい。屢々簡單な食事を取るのには、旅行者のよくやる事であるが、之は大いに利益ある事で、又旅行中の小休憩時間を與へてくれる事になる。

山岳旅行中に飲物を充分に攝る事は必要な事で、充分に飲む事に依り身體が洗滌せられ有害なる代謝産物が迅速に體外に排泄せらるゝのである。最も容易に得らるゝ飲物、即ち水に對して、多くの人は可成不安の念を抱いて居る。水の如く寒冷なる水を一度に過剰に飲む事は確かに消化器を害ふ事になるが、高地の人の稀な地域にあつては、有害な細菌は殆ど水に含まれて居ない。私自身も水の如く冷たい水を飲んだ事は多いが、未だその害を蒙つたこと云ふ事に就いては何等の經

験もない。雪や氷を食べるのは、口腔粘膜の不愉快な炎症を惹起するに至るものである。

私はアルコール性飲料は如何なる形式に於ても携帯しない。「コニヤックをルックに入れるのを忘れるな」と云ふ言葉が有るが間違つて居る。之は最初は興奮性に働くが、直ちに倦怠の念が増して来て、利益よりは害があるのである。そして一杯飲むと、又二杯目云ふ具合になる。實際アルコール類は疲労を一時紛はすが、此の作用は痲痺的であつて、速かに疲労困憊に至らしむるものである。体を温める作用があるが之は一つの偽瞞のやうなものである。初めは胃粘膜を刺戟し、次に血管神経を痲痺せしめる。即ち動脈は開張し血行は豊かとなり、主觀的に温暖の感を起さしめるのであるが、此の時に體表面より大量の熱が体外に放散して居るのである。それで体をワインや火酒で暖めんとする者は、自分で凍死の危険を高めるやうなものである。

馬の拍車は最後の短時間の努力を爲さしむるには有効であると同様に、アルコールも理論的に云へば最終の手段として價值あるものである。然し疲れて居る時には、酒によつて目的地の遠い事を忘れられると云ふ事は、容易に認めらるゝ事である。それで三十分で行けると思つても、實は一時間も歩かなければならない。要するにアルコールは判断力を鈍らせ、危険に對する注意を粗らしめ、登山技術の不確實を起さしむるのである。それは假令自分では正しいと思つて居ても起つて居る事である。

頂上に於て、努力の報酬又は勝利の祝ひの意味で、杯を捧げるのは、下山の樂な事が解つて居る時にのみ好い事で、又何等の不利益も無い。然し猶困難を嘗めなければならぬ時や、下山行程の疑はしい時には、祝杯は登山旅行の全く終るまで延さなければならぬ。考へのない前祝ひは失敗の原因である。

刺戟劑は屢々何の氣無しに用ひられる物であるが、稀には必要で推奨の價值あるものである。初心者でも又熟練者でも時に出發後餘り早く疲労を感じる事がある。登山中に自分又は他の者に疲労の徴候が明かになつて來た時には、遠慮なく其の事を皆に告げなければならぬ。又氣分の悪い時にも同様であつて、之が休息を爲しても軽い食事を攝つても効の無い時には、途中より引返さなくてははいけない。かゝる際に下手に恥かしがつて居ては、種々の不幸を呼び起す事になる。又中止せずに刺戟劑の力を藉りて登山を續けんとする事も、絶對に不可ミスべきである。若し途中から引返さねばならぬ時には、そのグループ一同は共に旅行を中止しなければならぬ。旅行のみを續けやうとして、氣分の悪くなつた友を一人で

返すやうな事は、アルピニストとしての義務を大いに破るものであると私は考へる。

疲労の危険には往々凍傷の危険が伴うて起る。殊に吹雪や露營の際に起り易い。此時も出来得べくんば引返すのが第一であるが、若しそれが不可能であつたならば、何處か避難所を見つけて、風ミ雪崩に對する防禦を爲るがよい。雪が温味を與へるとは、雪ミ人体の間に中間物例へば板石、毛布或はスキー等の雪穴を造るに足る空間が在る時のことである。凍傷の唯一の豫防法は、絶えず身体を動かし居る事である。良く練習してある身体と粘り強い精力とは凍傷に對して驚く可き抵抗力を有して居る。

如何にしても興奮劑の必要な時には、茶、コーヒー等がよい。之は興奮後の痲痺的作用が無く、腎臓の機能を高めて代謝産物の排出を盛んならしめてくれる。

我々は廣く賞用せられ、而も種々の害のある煙草を忘れることは出来ない。之も適當に用ふれば有害な副作用も無くその興奮作用を利用し得るものである。食糧欠亡の際に、私等をして一時飢渴を忘れしめる點で、この煙草に敵う物は無い。頂上に於ける慰みの一口は實に測り知り得ない悦びを與へるであらう。

さて最後に携帶藥品に就いて述べなければならぬのであるが、私は是に就いては餘り好く知らないのである。何こなれば私は今迄携帶して行つた事も無いし、又必要を感じた事も無いからである。藥を用ふるやうな人は登山者として不適當である。藥の必要な人は胃腸を整へ、消化を促進又は抑止する藥品として、カスカラや蒼鉛製劑の如き錠劑、粉劑を携帶するのも宜いが、正當な準備、適當な營養の場合には此等の藥品は不要である。アンチピリンや臭素劑の如き鎮靜劑は、旅行後に來る不眠症例へばグレッツチャーブランドに因る不眠症に、屢々適効を見るのであるが、餘り必要でもない。睡眠劑は翌日の思ふまゝの活動を與へるものとなるのであるが、之を旅行出發前に用ふるのは避けなければならない。救急繩帶には丸く卷いたのが大いに便利である。又二枚の清潔な布を繩帶として用ふるのは、以前よりバイブや救急食糧と共に袋に入るべき登山準備品の一つであつた繩帶より、一層推奨の價値あるものである。

旅行が全く終了したならば、消費した体の貯藏力を休息と滋養食によつて補はなければならない。又新たに登山を企てる前許りでなく、再び平常の生活に返る時にもそれ以前に全く疲労が恢復して居るやうにすべきである。睡眠と充分なる食事がその一法である。かくして初めて登山家は、最上の收獲を持つて家に歸る事が出来る。青年時代の合理的な登山に

依つて、その時代の若々しい元氣は永く老年に至るまで續くもので、之に就いても幾多の證例を認める事が出来るのである。(Ratgeber für Bergsteiger 46)

少くとも山に入ると云ふ事に依つて、大部分の人は日常の生活とは異つた状態の中に身を入れなければならない。此別種の生活に入り、少からざる筋肉的、精神的勞作に服するには、やはり根本となるべき身体を考へぬわけにはいかぬ。登山者としての体力即ち所謂貯藏力或は耐久力を養ふに就いても、注意すべき事が極めて多いのである。幸ひ此文は登山者に對し、餘り専門的にならぬ範圍に於て、比較的詳細な助言を與へてくれてあつて、我々の参考とすべき點も少くないと思はれる。此處には主にアルペンの夏山の場合に就いて述べられてあるやうであるが、夏のアルプスのみならず、冬季スキー登山者としても又は山の大小に拘はる事もなく、味ふべき言葉を可成見出し得るであらう。技術の進歩と共に此の重要な身体の問題に對しても、一層深い注意を拂はれ、山岳の不幸事件を少からしめ、合理的登山の完成を期したいと再言する次第である。(GOK生附記)



クリスチヤニヤ

長谷川 敦

各種ビンドウングの得失に就て

仙 波 正 雄

自分の貧しい経験と推理を元とし之に多くの人々の觀察研究を加へてこの大きな問題を取扱つて見る。

弘法は筆を撰ばず澄してゐる人はそれ迄であるが我々凡庸の者は大いに筆を撰んで幾分でも良い効果を擧げんと努力するより外はない。

現今（主として本邦に）行はれてゐる雑多のビンドウングの得失と云ふやうなものを、例へその結果は貧弱に終らうとも、考へてスキー術を行ふ上に於て最善の効率を得んと努力することは強ち無用のことでもなからうと考へる。こゝに私の述べんとする所は私が勝手に考へてゐることでこれが正しいと飽迄ガン張るのではない。唯御參考にもなれば結構と思ふ。又是は科學的に述べたものでもない。雜

然たることを雜然と並べたに過ぎぬ。屁理屈を云ふと思つて讀んで戴きたい。種々の點に於て先輩諸氏の御教示に俟つ所が非常に多い。どうか惜しまず貴い御研究を示して戴きたい。

ビンドウングの分類

ビンドウングの分類は頗る雑多である。何しろ多くのフアクターの組合せで出來てゐる種々の締具を捕へて來て、その中の一點若くは數點のコンモンフアクターによつて分類しやうと云ふのだから仲々面倒である。故に、この問題は一口にコンモンフアクターの取り方一つで決つてしまふのである。何れにも片附けてしまふことの出來ないアイノ

コが出て来るから愈々難しくなる。A. Lunn 氏の示してくれた分類は先づ良い方であるが、その基く點の取り方が氣にくはぬ。矢張り不満である。それは全縮具を「Rigid Binding」? Spring Binding に二分別するのである。所で運用上は謂ゆる Rigid Binding と同様で、スプリングを有するもの（私はこれが出来れば殆ど理想的のものではないかと思ふ）なごはアイノコになつて失ふ。善良な銅板を用ひてスプリングをこした Ellisen などアイノコを考へてよいことになる。

そこで私は次の分類ではさうかと思ふ。それはスキー運用の點より見て、縮具の主なる廻轉部の位置によつて分類しやうと云ふのである。即ち次の如くである。

A 種 足底廻轉式

B 種 足先廻轉式

A は人間の足の自然的運動に一致するものであり、B は然らざるものであると考へる。吳々も私は類似的點はあるが A. Lunn 氏の如く toe iron の動、不動やスプリングの有無によつて分けるのではないことを斷つてをく。

從來のものは次の如くであるが、何れにも賛成し難い。

1. 填國式—諾國式（こんなことを云ひ出したら際限がない。又根據があやしい）

2. 山地用—平地用 或はアルペンスキー—ノールウエー

スキー（平地の意味）（誤解をまねき易い）

3. 軍用型—一般型（いづれの點が特長となるか甚だ曖昧である）

4. 簡易式—完備式？（何を簡易の標準とするかは甚だ曖昧である）

5. 發條式—固定式（分類點の根據がよくない）

6. 靴臺式—縮革式（同）

etc.

もつこ色々の非難の點あることは明である。この外にもまだ色々の分類があるだらうけれど、略するとして、これらは何れも僅かの種類のものについてやつた分類を多くの種類のものに無理に適用した傾きがある。

何故に私は足底廻轉式、足先廻轉式なごに分けたかと云ふとこれは前にも云つた如く、縮具の運動が人間の足の自然的運動に一致してゐるか否かと云ふ點によつたもので、決してアイノコなどを生ずることはない。人間の運動を元とすればそれは殆ど絶對的であるからである。

こゝに廻轉と云ふのは實際機械的に廻轉する關節の如きものゝみならず、明かな廻轉部は眼には見えなくとも、その運動を恰も廻轉部あるかの如く見なしてもいゝものをも含んでゐるのである。A 種にはこの假想的關節のものが多いことを注意してをく。

終に私の分類に従つて多くの縮具をまとめて見やう。

A種 足底廻轉式

1. Huitfeldt 2. Niven 3. B. B. 4. Ellhøsen

5. Balata 6. 小島折衷式 7. 山善式

B種 足先廻轉式

1. Lilienfeld 2. Bilgeri 3. Wiener 4. Schuster

5. 櫻庭式 6. 折衷式の或るもの 7. 金谷式

兩種縮具の一般的得失

先づ人間の足部の運動を考へて見る。歩行の場合には第一にその足趾の第一關節即ち趾の着根の關節を廻轉軸として平面上にある踵を上げる、足底と指の部分とは或る角度をなす。この時第一關節を軸とするモーメントは身體の重心に前進運動を起させる。このモーメントを起すためには筋肉の力を要する。次の爪先に於ける廻轉運動は力を殆ど要せず、その廻轉角も前のより大きくない。その内に爪先は平面を離れてしまふであらう。このことは普通の歩行の場合よりもスキートの平地滑走の型の如く歩行する時に殊に著しく解る。即ち人間の足は斯の如く動くやうに出来てゐる。これは足の自然的運動である。第一關節を曲げることなしに（或は極めて僅か曲げて）足底を板の如く平面にして爪先ばかりのモーメントで廻轉せしめて踵を上げるので

は決して歩めるものではない。これは不自然である。特に足に力を入れて前進作用を大にしやうと努力するときには更爪先などで立つてはやり難い。

所で今A、B二種の縮具の運動を調べて見る。A種では廻轉部が足底（趾に近い）にあるから、その部分を軸とする廻轉運動はなし得るが、爪先には廻轉部が無いから、趾から先は殆ど常にスキート上にある。強ひて踵を上げるとき極く僅かに爪先が廻轉部となるだけである。足は常に第一關節を軸として踵の上下運動をすることになる。即ちこれは足の自然的運動と一致すると云ふ結論に達する。

B種のものではその主なる廻轉部は爪先にある（足底にもあるがそれは爪先のものよりも曲り難い）からこの縮具を着けた足の運動を見ると、スキートに對して足底がA種の場合と同じ角度をなすためには、趾の第一關節が未だよく曲つてゐない（或は曲らない）内に爪先が廻轉軸となつてゐる。即ち爪立てゝゐる。これは明に足の自然的運動と矛盾してゐる。これはB種の縮具の最大なる缺點と思ふ。この缺點を償ふためにスプリングが設けてあるのであるが、それは未だ十分ではない。爪先で廻轉することはB種の先天的の性質でこれ以上救済は出来ない。なほB種では30。以上廻轉し得るものが多いが、このことが不必要なことは明である。

足の自然的運動に縮具の機械的運動が一致することは、あらゆる場合のスキー運用に於て合理的に従つて輕快に親しみよくやり得るのである。踵を上げたときに足とスキーとの接觸點が唯の爪先の一點(軸)ではなくして足趾以上の部分の平面で接してゐると云ふことは、足とスキーとを非常に親しみよくさせる。

何故にB種の如き縮具が創案されたか、しかもそれが特に高山用として用ひられてゐるかと云ふことを考へて見るそれは高山(勿論Ice-technique & Rock-climbingを必要とする場合)では大抵ネールドブーツを穿つてあらう。その靴底は非常に曲り難いからそれを穿つた足は剛直な足と同じ効果になつて、趾の第一關節は殆ど廻轉出來なくなる。だからA種のものを用ふると非常に踵が上り難くなる。従つてA種のものを用ふるは困難と云ふことになるのである。しかしこゝにネールドブーツを用ふるよりも普通のスキー

靴を用ひ、Ice-technique & Rock-climbingのときは克蘭ボンを用ふる方がいゝと云ふ説がある。反對にいけないと云ふ人もある。兎角これは登山界の大問題で、我々淺學未經験の者が論ずる資格ないことは云ふ迄もない。かかる説さへ出てゐるのだから或はハイアルプスにもスキー靴でA種の縮具を用ひた方がいゝかも知れないと思ふ。ハイアルプスはさてをいて大抵の場合のスキー運用のとき何を好ん

でB種ものを用ふるか云ひ度くなる。この外に多くの他の缺點をも有するものを苦しみを忍んで用ふる必要はあるまい。

スキーを離れた踵を元の位置に戻さんとする弾力作用はA種では靴底の革の弾力、縮革のテンション、足趾の筋力靴臺の弾力なごの全部或は一部分による。この弾力は範圍は狭いが力は強い。又作用は敏速である。B種のものでは殆どスプリングによつてゐる。この弾力作用はスプリングの得意とする所で、幾分遲鈍の感じが無いではないが、足に及ぶその感じは決して悪いものではない。尤もこのこゝは弾力が十分強い場合のことである。B種の中のスプリングを用ひた縮具で若しその弾力が弱かつたならばそれはもう全然價値が無いと云つても差支へないと思ふ。私は決してスプリングそのものを嫌ふのではない。否寧ろこれを善用したいのである。

次にスキー運用時に於ける得失を少し細く述べて見やうと思ふ。

平地滑走の場合は今迄云つて來たことで大概解ると思ふから略する。

次に擧げるのはテレマークスウィングの場合である。このスウィングに於ては後退足の爪先のデリケートな作用は無意識の中に全體の運動の結果に大なる影響を及ぼすもので

ある。後退スキーのヘラ部の僅かな壓下やエツヅングは非常な効果を持つ。特に深雪の場合に著しい。B種ではこれが非常に困難であるか或は全然出来ない。

次にジャンピングの場合である。私はジャムブに就ては丸で貧弱な経験しか持つてゐないので、明言は出来ないがサツツをやつてから空中へ出たときである。A種の締具のついてゐるスキーだと木部の重心が支持點より少し位後になつてゐても、或は飛び出した初めから尾部が下つてゐても、スキーが足に確かりよくつ着いてゐるから爪先を壓下することや足首を下に押し曲けることによつてこの悪姿勢を空中に於て調整することが出来る。だから着陸に際してスキー底面と雪面とが平行になつてゐる。故にかの尾部をダラリと下げたまま着陸して尾部を弾かれて転倒するやうな醜態をやることは殆どない。ジャンプのときにB種のものを用ひることは禁ぜられてゐるが往々にして無鐵砲にも用ふる人がある。スプリングで締めてあつてもどうしても動き易い廻轉部を足先に有するため前述の如き悪姿勢に導かれ易いのみならず、不都合に轉倒したときには全く危険である。もしスキーが足先と直角近く廻轉したまゝ斜面に横はり、身體ばかりが捻れたとすると足部を捻挫することは明かである。所がA種のものだとスキーの表面と足底がしつかりくつ着いてゐるから、足底とスキーとは大きな角を

なすことを許さない。故に足が捻れるとスキーも共に捻れて捻挫を起すことは殆どないのである。

これらの他では例へば、後退する場合に尾部を持ち上げることや深い雪の中でスキーを扱ふ場合にA種のものとは非常に具合が良い。キックターンなどもより敏速になし得る併しA種のものではテレマーク制動をやるのが幾分困難である。それはスキーと足底とが大きな角をなすことが制限されてゐるからである。足首を下肢に對し直角に曲けることは可成り苦しい。又その後退足に於て足底をスキーに殆ど直角にして全然跪つかねばならぬ姿勢も苦しいものである。しかしこんな制動法がつまらぬものであることは今更説くまでもない。だからこんなことは出来やうと出来まいと大した問題じやない。B種のものでは樂々と出来る。

A. Linn 氏はその著 "Cross Country Skiing" の中に爪先の剛直な人は固定式の締具を用ふることは出来ない云ふやうな注意をしてゐる。歐米人は小さい時から靴を穿つてゐるから或は先天的のさう云ふ痼疾の人が可成り多いのかも知れない。しかし我々日本人にはこの心配は殆ど無用と云つてもよからうと思ふ。後天的のものは致し方ないとして先天的の剛直は殆どない。何故かと云ふに我々は赤ん坊時代から裸足で疊の上を這つたり、下駄と云ふ有難いものを足の先につつかけてアンヨは上手と育てられて來たのだ

からこの點は大丈夫である。足の指先の運動は非常に樂である。

大部分のA種のもは大きな *toe horn* を有してゐる。是は足の左右水平運動を矯正する必要上附けられたものであるが、何しろ形が大きく相當の深さと巾を必要とするから締具が雪に埋つたとき滑走のスビートを減ずる。

殊に *Brackable Crust* の如き場合は抵抗が多くて非常に不快であるB種のものでこの心配あるものは殆どない。併し粉雪や軟雪のときはちつとも固へはない。

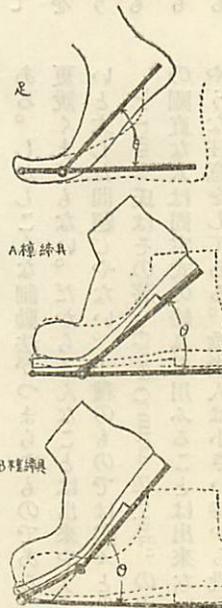
A種のもは大體に於てB種のものよりも締具の高さが低いから足とスキーとを親しくさせる。従つて輕快云ふことになる。

又こんなことは何んとも云へないが極く大體に於てA種のもはB種のものより輕量である。

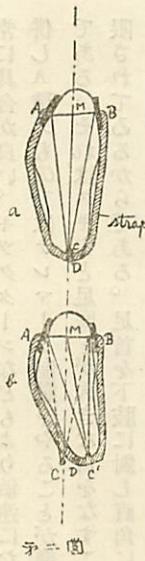
應急修繕のきかぬ破損の場合に於てA種のものであると豫め木部に横穴さへあけてをけば直に紐式の締具に改造して可成り用ふることが出来る。しかしB種のものであるとこの事は殆ど出来ない。改造した所で非常に不完全なもので運用することは殆ど出来ないと云つてもいゝ位である。此事は登山や旅行の場合に常に重要なことでA種の長所の一つとして數へ得ると思ふ以上述べた所は要するにA種とB種とを一般的に比

較して見ると概してA種の方が長所が多く、これに反しB種のもは缺點が多いと云ふことをくだくだと云つたに過ぎぬ。次に個々の締具につきその特有な得失を大小とも雜然と並べて見やう。

第一圖



○ 主要の廻轉軸
● 次要の廻轉軸



第二圖



A 種締具の個性的得失

一、Huffeldt 附紐式

これは最も廣く用ひられてゐる優秀な締具の一つであるが、その踵の左右動搖が比較的容易だと云ふ點で嫌ふ人もある。しかしこの水平動搖は丈夫なスキー靴を用ふることに *Toe Iron* の調整、締革を強く締めることなどによつてその大部分を償ふことが出来る。私は水平動搖を嫌ふと云ふことは正しいと思ふ。この動搖こそ身體のバランスをとる上に就て必要なもので、熟練者の所謂コツのある所だなき云ふのはヤセ我慢かさもなくば寢言ではあるまいか。某大家の言に『靴の踵は靴が足底板を外れたとき舊位に復する障害となれば、その踵を附せず』とある。どんな *Huffeldt* を用ひたかは知らないが、こんなに搖れては勿論話にならない。全く使用に耐えないと云つてもいい。靴の踵が餘り高いと足とスキーとの距離を大にし又強く締革を締めたときに靴底が反對に下方にコンケーブになる恐れ（尤もそんなに弱い靴底では駄目であるが）があるから良くないと云ふのなら話は解る。厚い牛皮を縫合せて少くとも *semi* 位の厚さを有する締革を用ふれば革が延び難いから、そんなに動くものではない。子供なんかのよく用ひてゐる一枚革の粗製品があるがあんなものは全然駄目である。

この締具や *Zvea* などが比較的搖れ易いのは次の理由によると思ふ。何しろ *Toe Iron* と靴とは金屬ミ革（例へてコバ金具を附しても）との接觸であるから、絶対に左右水平廻轉運動を禁じ、上下垂直廻轉運動のみ自由に許すと云ふことは仲々困難である。靴にコバ金具を附すると磨滅の點は救済されるがこの點は餘り効果がない。

Huffeldt では足先の兩側で二點、踵の中央で一、都合三點で一平面を決定し、その平面が即ち第二圖の三角形 *ABC* が *AB* なる水平軸を中軸として廻轉すると見なして差しつかへない。

その三角形が *a* 圖の如き形なれば踵は正確にスキー上にあるが、*b* 圖の如く歪むことは踵が右に動いたことを示す *a* 圖に於て踵の中央 *C* に相對する締革の接觸點を *D* とする即ち *C* と *D* は同じ點となつてゐる。然るに *b* 圖の如く變形するときは *C* は *C'* に來るが *D* は元の儘で従つて *C'* と *D* は一致して居ない。これは即ち踵に於て締革がスリツプしたことを意味する。故に *C'* と *D* とを一致せしめること即ち *CD* を離さぬことは、革と踵との摩擦抵抗が大であればよい。そのためには踵に對する摩擦係數の大なる締革を用ひ、壓力を大にし（即ち強く締め）なければならぬ。従つて延びの少い締革を用ふることも必要となつて來る。摩擦係數を大にする必要から云へば踵に金具を附して締革の脱落を防

ぐことはよくない。踵の革を凹形に削り取つたものゝ方が
良い。何故なれば金屬と革との摩擦係數よりも革と革との
それの方が大きいからである。絶対にスリップを止めるや
うに何か踵の皮と噛み合ふやうな装置を附ければいゝと思
ふ。そうすれば Hutehield の踵動搖は非常に少くなると思ふ
この外の點も入れてこの縮具の水平動搖をする原因をま
とめて見ると次の如くなる。

一、縮革の延び

二、靴の踵と縮革との摩擦係數

三、M C 間の距離

四、縮革の締め加減

五、toe iron と靴との調整の正確程度

(一)はその延びの難易の度に正比例する。延び易いものは
前述の缺點の他に toe iron に靴を押込み得ぬ缺點を伴ふ。
(二)はその係數の大小に正比例する。(三)はその大小に正
比例する。M C が大であると爪先が比較的確定されてゐて
もモーメントの臂が大となるから動き易くなる。(四)は、
(一)と同様でその締める強さに正比例する。

中でも(五)は可成り重要位置にあり且つそれは比較的正確
に調整し得る。(二)は縮具の性質として之を縮めるこゝ
は出来ない。もし靴を toe iron の中に深く入れると M C は
勿論短くなる。之に他の理由も加つて動搖は餘程少くなる

が肝心の垂直運動が非常に困難となるから不都合である。

この左右動搖を防ぐため姑息な手段ではあるか、足底板
に靴底と摩擦の大なるものを用ふことがあるが、それは
餘り効果がない。又その結果は足底板を早く摩擦するやう
なこゝになつて餘り感心したものじやない。幾分でも左右
に動搖し易いと云ふことはこの縮具の致命的欠點の一つで
はあるまいか。ステムボーゲンやステンミングの時足のみ
V 字状をなしてゐてもスキーは幾分先端を開いた形をとる
ことがある。これには屢々困ることがある。スウィングな
ればこの心配はない。しかしこれも程度問題でステムボー
ゲンが殆ど出来ないと云ふ意味では決してないことを斷つ
てをく。

練習場のヘーリングボーニングの場合にも困るこゝはあ
るが、B 種のものに比ぶれば勿論遙かに容易である。

縮革がスキー木部を貫通してゐることは最も重要なこと
で、これあるがため廻轉部が足底にあると云ひ得るのであ
る。しかし困つたことには、このことは toe iron と同じく
縮革がスキーの幅より出張つてゐるため雪に對する抵抗を
非常に大にする。又そのため縮革を摩擦せしめる欠點があ
る。しかしこれは前草のみ金屬性のもの(例へば針金、ワ
イヤロープ、鏈)などを用ふる或は革を金屬性のもの
で被ふ(例へば針金を密に巻くとかブリキの如きものを巻

き着ける) ことによつて不完全ながら幾分救済し得る。この欠點を除くため往々にして *Toe iron* の左右に穴をあけてその部分から締革が廻轉し得るやうにしたものがあるが、そんなことをしては此締具の價値を全然無くするものと云つても差支へない。又横穴は前に偏してあけても同様の効果となつて悪い。*Toe iron* の下あたりが丁度よいのであるこの締具では踵を上けると締革の長さが不足になつて來るこのとき生ずる強い革のテンションが彈力作用を大いに助けるのである。これに反し横穴が後に偏するミ踵が非常に上らなくなつてしまふから又悪いのである。

Toe iron が革を摩滅する欠點もあるがこれは前と同様金屬のものを用ふる *Toe iron* の角を幾分丸くすればよい。

此締具は大部分が革製だから弱いと云ふ人があるが念入りに正しく作つたものは決して弱くないことを斷言する。登山や長途旅行に用ひても大して差支へない。浸み込ませる油さへ吟味すれば極く寒冷(零下二〇度〇近く)な状態に置いてても決して破損するやうなことは無い。

却つて革製だから應急修理が比較的よくきく長所がある金具のみだとそうは簡單には行かない。又金具のものより非常に輕量である。

踵革についてゐる *Erlösen clamp* は着脱に便のみならずこれあるがため更に靴を *Toe iron* の中に壓し込み得て踵動

搖を防ぐに役立つのである。轉んだときこれが恰も安全辨の如き働きをして自動的にスキーを脱せしめて足の捻挫を防ぐと云ふのは机上の空論ではあるまいか。こんなことは實際に於て經驗したことは無い。却つて靴臺を有するものより脱け難い。轉んだとき不都合な姿勢に於ても容易に脱し得ると云ふのなら別問題である。

Toe iron は靴にピッタリミ合せる必要上これを常に一定の形大きさに調整したまふである。だからこれを何人でも共通に用ふるには不適當である。しかし自己の道具を愛する眞の愛好家には共通的であらうと無からうと大した問題では無からう。共通的にするには機械的構造を少しく考へれば多少は重くなるだらうが、不可能ではない。

丈夫なスキー靴を用ひなければ完全に運用することは難しいがこれも熱心な登山家やスキー家には大した問題じゃないと思ふ。

足の内側に於ける踵革との接續點に美錠を有してゐるものでは、それが邪魔になるが、この事は革を一本にするか又は構造を少し改良すれば除き得る。

紐式と云ふのは *Hutfield* の原始的の形のもので唯是を不完全にただけである。運用上は不満足な點を有するけれども同様に用ひ得る。説明は略する。應急修理のきかない破損をしたときこの式に改造して用ふることは前に云つて

をいた。

II. B. B.

私は未だ自分で使用したことはない。人を見たゞけであるから確かなことは云へない。

A. Lunn 氏はしきりに之を推賞してゐる。先づ長所として次の諸點を挙げ得ると憶測する。

足底廻轉式だゞ云ふ外に一、全部が金屬性で構造簡單だから破損し難い。二金屬性ではあるが輕量である。三雪に對する抵抗が少い。四着脱が非常に便利である。五構造上左右動搖が少い。なきがあると思ふ。

この縮具の特長である所の靴の先だけで引つ掛けて居ることは非常に動搖せしめ易いやうに思はれるがその心配はない。寧ろ動搖を少くすると思ふ。何故なればこれに於て靴を確定する點は、Hutefeldt のそれとは異り、靴先で左右の二點と中央の一點である。即ち第二圖の三角形 ABC の C が AB の前方にあつてその三角形は高さが可成り低い。即ち MC の距離が短い。

又革の延びとか踵に於ける縮革のスリップと云ふやうなものが無い。これらの點と前の MC が短いと云ふ點から云へば、この縮具は寧ろ Hutefeldt よりも動搖は少いのである。足の先端で固定されてゐても、主なる廻轉部は足底に

あるから足に親しみ悪いと云うことはない。

唯困つたことには靴の先端に獨特の鉤狀の金具を可成り頑固に着けなければいけない。これは特に頑丈な靴を必要とする。又この鉤金具は歩行の場合決して邪魔にはならないと云ふ。山では大抵クランポンを着けるからこの金具あることは餘り影響しないと云ふが、これはどんなものかと思ふ。雪の上をのみ歩くと限つて居ればいいが、岩石、土又は其他の上を歩まねばならぬことは登山の場合に於ても普通の場合に於ても大いに有り得る。唯に歩行の時に靴先から更に突出してゐる金具が邪魔になる許りでなく、その鉤の摩擦し易いベンドの所が摩擦してゐたらどんなものだらう。もしもそのためベンドの所から折損したなれば、それは致命的の損傷で、ちよつと應急修理と云ふ譯に行かないであらう。その結果は恐しい。摩擦を減するため硬い鋼を用ふれば脆くなる。軟いと摩擦し易い。全く困つたものである。常に弱くならない内に着替へてをくことも靴の命にかゝわるから餘り出来ない。別に他の靴を持つて行くことも馬鹿らしい。全体の重量と体積を増すことになる。然らば鉤を着脱し得るやうにすればいいが、その確實さは直接打ち着けたものに及ばないであらう。しかしこれは巧なる工夫によつて重量は幾分増加するかも知れないが救濟出来るかも知れない。この點でこの縮具を用ふることは躊躇

されはすまいか。しかし豫め木部に横穴をあけてをいて破損時に紐式に改造し得るやうにしてをけば愈々困つた場合に役立つ。

Clampの金具は固定的であるがこれは前後に調節し得るやうになつてゐる方がいゝと思ふ。

III. Nivea

これは Hutfeldt と殆ど同じで、縮革を締める Clamp が靴の前方にあるだけである。そのため軽便に締めたり緩めたりすることが幾分困難となる恐れがある。何故なれば縮革の通る摩擦部が多いからである。又そのためにあまり硬い厚い縮革 (Hutfeldt の如き) を用ふることが出来ない。従つて幾分薄い革を用ふる結果左右に動揺し易いこととなる。縮革は toe iron の下スキの側面に添つて居り且つ幾分薄いから雪に對する抵抗は比較的小である。又内側に美錠の如きものが出てゐないこともよい。それは前方の邪魔にならぬ所で調節し得る。

しかし動揺し易いことは大なる欠點である。

IV. Ellelsen

これは靴臺を有するから水平動揺は殆ど制禦されてゐる。又 Ellelsen clamp を附したものでは靴を toe iron の中に壓

し込み得るから大いに制禦を助ける。着脱も便になる。

靴臺となる薄い鋼板はそれを固定する點さへ toe iron の中程の所に置けば締具は合理的に働く。この鋼板は彈力作用をなすからスプリングの一種と見ても差支へはない。しかし困つたことには用ふる鋼板の硬軟の度が難しいのである。硬きに過れば彈性は大となるが脆くなるので折れ易い。その折損は致命的である。應急修理はきかぬ。軟かければ轉倒による無理な變形なきのためプレートが却つて上反りになることがある。これでは彈力作用はマイナスに働くから寧ろ害である。又プレートの厚さも餘程考へる必要がある。これらの點は永い間の研究と觀察に俟たなければならぬ。

何しろ薄い金屬板をその端に於て釘で留めてあるのだから、加ふる全部の力は殆どその端に穿たれた數個の穴に作用する。だから餘り過激な運動には適しない。

靴臺とスキとの間に雪が詰り易いことは不快であるのみならず、プレートの破損を非常に早める。

この締具は比較的穿心持がよいから之をモデファイすればいゝものが出来るかも知れない。

V. Palata

これは Ellelsen の鋼板の代りに木綿製調革即ちバラタを

用ひて靴臺となし、靴の踵を包む大きな革の被ひがついてゐる。これは貸スキーに適す云ふ評がある通り、私は寧ろ Elletson の改悪と云ひたい。

欠點としては、用ひてあるものがバラタだから弾力は甚だ乏しい。最初は相當硬かつたものでも水分を含ませたり屈曲を激しくするからすぐ軟かくなつてしまふ。だから轉倒に際し靴とスキーとが無理に大なる角度をなして足先を痛くすることがある。構造の性質上靴を toe iron に固く押し込むことが出来ない。それ故靴臺あるに拘らず（尤も靴臺も軟くなるため捻れるのであるが）踵は左右に動揺し易い。バラタは水分を含むと延び易くなるものである。このため大きな踵被ひがあるに拘らず轉倒したときには非常に脱け易い。又靴臺が捻れたまゝに固ることがあつて始末が悪い。踵被ひの中やバラタの下に雪が挟むことは甚だ不快である。又その大なる踵被ひは運般のとき邪魔になる。

長所を無理に探して見ると例の貸スキーが出て来る。靴臺を少し大い目につけてをけば、大きな踵被ひがあるため殆ど任意の大きさの靴を不完全ながらのせ得る。且つそれは調節する面倒がない。頗る無精に出来てゐる。こんなことは決して長所として數へ得るものでないことは解り切つてゐる。

六、小島折衷式

これは Hirtfeldt の toe iron と Lilienfeld の靴臺とを折衷した積りらしい。靴臺は弾力作用を有しないが機械的作用は Elletson よりよく似てゐる。この締具では弾力作用は靴底の弾力と踵を上げるために起る靴臺の長さの不足即ち窮屈さを利用してゐる。そのため主なる関節は toe iron のすぐ後方に設けられてゐる。しかしこの置き方に無理がしてあることは運動が圓滑でない云ふことになる。この關節の方に無理があることと靴を toe iron の中に押込むことが出来ないこゝこは轉倒時に非常に脱け易くなる。これは踵受けの小さいことにも原因してゐる。

この締具は A 種の中では最も重い。伸縮の調節をするため Lilienfeld と同様な靴臺を採用したのであらうが、これは Elletson の如く後半を革にして Champ をつけた方が氣がきいてゐると思ふ。

靴臺の伸縮は漸近的に行はれず又 Champ の如き作用をする装置がないから靴を toe iron にピッタリと合せ得ぬ。是のためと關節の摩擦とに伴ふ靴臺の左右動揺は運用に於て全く何の抵抗もなしに——範圍は狭いが——行はれるので非常に不快である。又靴の前後スリッパもやることがある。これらは革の如く弾力的又は摩擦的に行はれずガクリ／＼

とやるから堪らない。

この締具も貸スキーに適する方である。バラタよりは良い。しかしこれを全然使用に耐えぬミ云ふ人があるが、全然と云ふ程ではない。

雪に對する抵抗は少い。

靴臺は金屬で出來てゐるから雪の挟ることも少い。全体が金屬製で比較的構造簡單だから破損は少い。

七、山 善 式

これも Ellisen と Lilienfeld の靴臺をくつ着けただけであつて寧ろ改悪 Ellisen と云ふべきである。元の儘の Ellisen の方が優れてゐる

これに於ては靴臺の伸縮は單位的であり Camp を有しないため靴を toe iron の中に押し込むことは出來ない。用ふる鋼板は Ellisen と同様その選擇には大分困つてゐるやうである。

發賣品の中にはプレートの固定點のつけ方が餘りに前方に過ぎてゐるものがある。これは破損し難いと云ふ點を考へてやつたのだらうがこれでは運用上不合理である。是非何とか工夫して固定點を toe iron の所に持つて來なければいけない。

構造は輕量に出來てゐるが破損はし易いから Ellisen と

同様猛烈な使用には不適である。破損は應急修理がきかない。

B 種の締具の個性的得失

1、Lilienfeld

これは B 種の内では代表的のものである。昨今まで我國に於て最も廣く用ひられて居た締具である。

元來我國のスキー術なるものが軍隊を通して輸入された軍用スキー術であるから従つてそれに用ひられるスキーが軍用のものであることは何の不思議もない。

しかし万人がいつまでも幾多の不便を忍びつゝ因襲的に或は食はず嫌ひをしてこの締具を用ふる必要はなからう。もういゝ加減によしてもいゝと思ふ。又こればかりをいつまでもアルペンスキーと盲信してゐる人も少しは考へて悟つてもいゝと思ふ。潜越な言葉であるが許して貰ひたい。

元來締具全部が金屬製だから丈夫であると云ふのであるが、その點は製造に際し技術の熟練と材料の精選と云ふことを考へに入れなければ頗るあやしいのである。一般の製造者には望むべくして仲々得られない。

唯さへ構造が複雑だミ故障が起り易いのにその點があやしければ最早やお話にはならない。こんな例はどこ

一倉庫にも必ず轉つてゐる。

この締具を特に一名 *Alpen ski* と呼ぶのが誤りに導き易い點である。現今に於ては之より遙かに優秀な締具が澤山出來てゐるのである。破損の點を考へると寧ろ高山用には危険をさへ感ずる。

B種全体として持つ非難は前に述べてあるから略するとして、先づ全体金屬構造複雜のため恐らくスキー締具中最も重いだらうと思ふ。踵の確定は結構だがあの尠大な靴臺の必要はない。

用ひられてゐるスプリングの製法は甚だむつかしい。材料は勿論上等のものを用ひねばならぬが、その *Tempering* は仲々熟練を要するもので、専門家によらなければ到底完全な品は得られない。十數年許りも以前に砲兵工廠に於て製作された。我國最初のスキーに用ひられたスプリングは未だに故障がないと云ふ話を聞いた。これを見ても製法さへ完全なれば如何に丈夫なものであるかと云ふことが解る。そこの店の店から買つて來たスプリングを用ひて困つてゐる人は幾らでもゐる。實際B種のものでスプリングが切れた日には全然使用に耐へなくなると許りでなく非常に危険であることは前に述べた。強く締めなければ役に立たず、強く締めると切れるのでは全く困る。初めから強いものを製造すればいゝやうなものだけれども形が大きくなる缺點を

伴ふ。

針金のスプリングは折れないかも知れぬが弱くはないだらうか。

この締具でスプリングの調節を入れ換へが容易な點は長所の一つであるが、これは次の缺點を伴ふ。

この種のスプリングの性質として深いスプリングボックスを有することは感心しない。双方相入れぬから困る。スプリングボックスの底ではスキーの厚さは僅か5E₁₁—10E₁₁であるから他の締具を附けた場合の如くスキーに底溝を附することが困難である。附けるためには木部の厚さを大にする(重量大なる)か或はスプリングボックスの附近を残してその前後に附ける(効果は薄くなる)かしなければならぬ。底溝の重要なことは今更申す迄もない。平底のスキーによく平氣な顔をして乗つて居られると思ふ。この底が薄いことはスプリングが折れた場合に往々その支ふる棒が不規則に動いてその薄い部分を突き破ることがある。尤もこれは餘程薄くなつた場合の話である。

構造複雑のためよく起る故障の中には應急修理の困難な場合或は不可能の場合が多い。例へば關節が切斷された場合はよく針金修繕をやるが一度やつたことがある人はその殆ど効果ないことを知つてゐるであらう。餘程頑固にやつてをいても、細い針金に大きな力が作用するのだから直ぐ脱

れたり切れたりしてしまふ。全く吹雪の中で凍えた手でやる修理程みじめなものはない。この締具では全體が最も力の作用する第一關節の兩側にある小さい三角板によつて支へられる。その三角板は僅か三本づゝの木ネヂで固定せられ、しかもその木ネヂの相互距離は可成り接近してゐるのだから全體として耐へ得る力は餘程少くなつて来る。一本の脱落は二本の脱落となり、遂には全體の破壊なることが往々してある。

絶対に踵の確定を計つた點、大きさを任意に變へ得る點は長所として數へ得る。

今でこそこの締具は優秀なものとは云ひ難いがその昔に於てあらゆる困難に打ち勝つて之を案出した Zlatky 氏の絶大な努力と功績に對しては全く敬服の外はない。B 種のもではその大部分が種々の形に於てこれをモディファイしたものに過ぎぬと云ふのは過言ではなからう。

II. Bilgeri

これに用ひられてゐるスプリングは Lilienfeld のそれとは異り、關節の横軸に巻きつけたものを用ひ、その末端が延長されて靴臺の一部となつてゐる。この部分も幾分彈力作用をなして彎曲するからその部分の關節は省いてある。だから用ひたとき足に作用するスプリングの *Stress* は自然

的なやうに感ぜられ、この點は Lilienfeld より氣持がよい。しかしこの構造は屢々 *Bilgeri* の大缺點として擧げられてゐる所のものである。それはこの構造上スプリングの破壊は直ちに全體の破壊となつてスプリングの入換へは到底出来ない。應急修理など思ひもよらぬ。この缺點のためこれを登山や旅行に用ふるのは危険だと云ふのである。又概してキャシヤに出來てゐる。

又スプリングを納めた圓筒は比較的形が大いので足先が高くなる。その結果は登行のまきに靴がスリップすることがあるのでよくない。底溝は遠慮なしに附け得る。

III. Wiener

これは Lilienfeld を少し換へたものに過ぎぬ。即ちスプリングに Bilgeri と同様なものを用ひたゞけである。スプリングの入換へは出來たやうに記憶する。そのケースも Bilgeri 程大きくはない。靴臺は大きなものを有し全體の重さは Lilienfeld の伯仲する。底溝を附け得る以外の點では Lilienfeld と同様の非難を受ける。我國ではスプリングが切れても代りのものが得難いから不便である。

IV. Schuster

これは Wiener に附ける頑固な重い踵臺を *Hinterfuß* の氣

のきいた踵革に代へたやうな締具である。だからそれだけ軽いわけである。それは又例の大きな靴臺と異り靴を toe iron に押し込むことも出来、Ellisen clamp のあるため着脱も便利になる。

しかしこのやうな踵革を用ひては Hufeide と同様左右動搖の點は如何と云ふ心配があるがそれは殆ど無用だと云つてもよい。それはこの式ではスプリングで上下回轉運動を制限し、關節は足先にあつて toe iron も共に回轉するから靴を可成り toe iron の 中に入れても差岡へない。従つて左右動搖は殆どしなくなる。

スプリングの強さも比較的強い。又ケースも餘り大きくはない。踵革やスプリングの取換へも可成り易く出来ると云はれてゐるからB種の内では優秀なものだらう。A. Lunn氏はこれを推賞してゐる。

五、櫻庭式

Schuster が Wiener をモディファイしたものとするれば是は Lilienfeld をモディファイしたものと言ひ得る。

殆ど相似の點で稱賛を受け得るが、Lilienfeld 式のスプリングを有することは感心出来ぬ。底溝がつけられない踵革は簡單に取り換へ得る。重量は比較的軽い。Lilienfeld を用ふる位なら我國ではスプリングの補給が容易だと云ふ點

を考へて、この式を用ひてはどうかと思ふ。しかし決して推賞するのではない。これはB種の内に於てのみ云ひ得ることである。

六、折衷式の或るもの

往々にして一体何を折衷したのか了解に苦しむやうなものがある。唯 Lilienfeld のスプリングを除いただけのやうな怪物がある。こんなものが駄目なことは今更説くまでもない。大分影をひそめたが唯時々見掛けることがあるから一寸注意するまでである。

七、金谷式

これも怪物に屬する。従來の分類ではちよつと始末し難い代物だ。しかしこんなことはどうでもよい。

先づ Hufeide をモディファイしたものである。しかしその toe iron は廻轉し得るやうになつてゐる。又締革を通す横穴は toe iron の遙か前方にあけてある。これらの結果は踵を上げる際に何の彈力作用もなく行はれることになる。足先を中軸とする廻轉も頗る自由である。90 以上を平氣で廻轉して遂にはスツボリ脱ける、指の第一關節を廻轉軸とするなどは思ひもよらぬ。靴底の彈力締革のテンションなどは以ての外である。Hufeide の左右動搖を之に加へ

廻轉の容易云ふことを改良した積りであらうがその本来の
良い性質をなくして、悪い所ばかりとつたやうなもの
ある。

こんな締具が駄目なことは解り切つて居ると思ふから説
明は略する。運用に困る許でなく危険を伴ふことを考へね
ばならぬ。

重量の軽い點を Eltisen clamp をその儘用ひたことは良
い。

之で拙文を終る。出駄ラメを出駄ラメにならべた氣がす
る。スキーをやつて未だ日の浅い私は鐵面皮にもこんなこ
とを書いて見た。しかし考へてゐることは研究と云ふ程で
はなくとも眞面目に考へてゐる積りである。今までこの問
題は大して省みられなかつた。省みる餘裕が無かつたのか
も知れないが、このことについて幾分でも論じたものを見
ないので鐵面皮にもこんな貧弱なものを書いて見たのであ
る多くの同好諸君の中にはこの問題を深く御研究になつて
ゐる方があると思ふ。どうか惜しむことなく叱責を賜つて
貴い御研究を發表されんことを希ふものである。

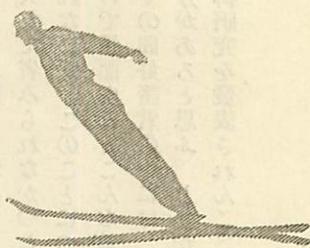
(一一・一一・四)

マロリー氏の二三ごも

長らくアメリカのダートマウスカレッジに居られた某氏
からマロリー氏に就て次の様な御話を承りました。

『一九二三年の三月でした。マロリー氏がアメリカに講演
に來られました。毎日足の弱わらない様にと、ニューヨーク
の摩天閣をエレヴェーターを用ひずに何十階までも上り
下りしてゐるなど、新聞に讀んだのもその時分のこととし
た。私は何んとなくその人の講演を聴き、どんな人か見た
いと思つてゐりました。ところが幸なことに私は私のをつた
學校のアウティング、クラブで、彼を招待して、講演會が
開かれたので、私は喜んでその一夕の話を最も緊張して聴
きましたそのあとで、我々の屬して居つたクラブで、同氏
の座談がありました。そこで又色々の奇聞を發して面白く
暮しました。當夜は今でも覺えて居りますが、中天に北極
光の如き放電盤に到り、無線電話が何等用をなさなかつた
晩でした。同氏の体格は意想外にもほそ長く、一見頑強の
様、更に見受けられず、春の高い人でしたが、最も強く感
じた事は、身体の平均が取れてゐると云ふことでした。頑
強といふよりも、すこやかな体つきでした。この人今やな
しと思ふとき當時を追想します』

スキージャンピングのスタイル



ダクフィン、カルルセン

廣田 戸 七 郎 譯 述

Daslinn Carlson 氏は、現存するオーストリーに於ける有名なノルウェーのジャンプでありまして、獨特のジャンプスタイルを以て、到る處に於てスタイルの革新的方面に貢献して居ります。氏はスキージャンピングについて次の如きことを言つて居ります。

私は先づ最初、自分が如何にしてジャンプを行つたか云ふことについて述べませふ。

ジャンプの第一階程は、アプローチから始ります。私は以前の人達が練習した様に斜面を真直ぐの姿勢で滑走するここをせずに、むしろ直ちに屈身の姿勢をとつて行きます。そして両手は前方に突き出し、間もなく一定の姿勢をとり

ます。この姿勢は体の受くる空氣の抵抗を極度に最小にして、滑走速度を可及的最大にする點に於て、効果あるものであります。

而してシャンツエの端に達した時は、第二の階程即ち踏み切りになります。

踏み切りにには凡べての事が關係して居ります。即ち踏み切りは早過ぎても良くないし、又遅過ぎてもいけません。若しも踏み切りが早過ぎると、遠距離に飛躍するここを欠きますし、又遅過ぎると踏み切りが危険になり、其結果ジャンプは兩脚で着陸する代りに、大して不愉快云ふ程ではないが、背中から着陸するこゝになります。私自身は可及的遅く踏み切ります。即ち精しく申せば、私は若しも

兩スキーが不揃いになつて危いときには、ジャンツエの端で半米突き出してジャンツエから離れて空中に出ます。(原文には一方のスキーを他方のスキーの先方に半米突き出すと云ふ工合に書いてありませんが、恐らく半米突き出すと云のは一方のスキーを他方のより半米突き出す意を譯者は考へます。)

踏み切りは可及的有効になるやうに極めて速かでなければいけません。皆さんは只、單に力強く立上るだけでなく普通の高跳びの時の様に、思ひ切り踏み切らねばなりません。凡べての緊張、凡べての氣合を此處に集注せねばなりません。踏み切りは足底全体では効果がなく、むしろ爪先で行ふ方が有効であります。たとひ踏み切りがしばしば優れて居る様に思はれる場合でも、そのジャムブは踏み切りで決定的に優れて居るものであります。そして吾々は空中でいろく、姿勢の崩れた際に、それを矯正することが出来るものであります。

私はジャンツエから離れた時にどうするかと申しますとそれは雪の状態に關係があります。即ち時々、特に私の好きな良質の雪の場合には、稍々高く上ります。と申しますのはつまり、空中で踏み切りの端よりも高く自分の体の上るのです。

そして空中に飛び出すや否や、適度に前傾の姿勢になる

ことに留意し、そして斜面の方向に兩スキーを壓し下けることに注意します。斜面に直角の姿勢になる云ふことは多くの専門家の判断によりまして夫々特徴のあることで、私のスタイルに置きましては、自分が空中飛行の高點に達した時、始めて自分の体を下方斜面に直角の位置に持つて行きます。夫れと同時に私は一方のスキーを稍々高く上げます。然しその時意識してやります。そして兩スキーを平行に揃へて垂らさずに置きます。

私はそれから前方でもなく或は後方でもなく自分に適當した様に兩腕を廻轉します。

世間の人は私が兩腕を後方に廻轉して、強く前傾の姿勢に均衡を與へて居ると言つて居りますが、然しそれは實際は正しくないのであります。夫れは皆さんが兩腕を廻轉する様に全く任意なのであります。私は何時も猛烈に前傾姿勢に注意して居ります。特に着陸斜面に近づいた時ですら注意して居ります。地上に近づいたと感ずるに意識的に着陸の準備を致します。私は程よく上体を前方に傾け着陸面に延ばす爲に左のスキーを前方に押し出し、斯くして着陸の確實性を高めます。

着陸に當つて衝撃を右脚に感ずると、左脚を右脚よりも一層深く屈します。

如何なる場合に置きましたも、着陸の衝撃を少くする爲

に、又不倒ジャムプを以て終るやうにする爲に、踏み切りは圓滑にせねばなりません。そして最後には單に直滑降が有るのみです。この直滑降に關しては、私はくどくどしく申し上げることを止します。

ジャムピング滑降を見て、そして是を習得せんとする方は、失づ第一に練習の爲に小さいジャムピングヒルを撰ばねばなりません。即ち跳躍の時のやうに、自ら一つの概念を持たねばなりません。而も他の凡べての事柄は個性の問題であります。練習者は自分の個性に最も適當して居るところのものを、正に自ら捲み出さねばなりません。如何にすれば確實性と正しいスタイルミを習得することが出来るか云ふことを考へねばなりません。

私は斯ういう考へを持つて居ります。即ち始めてジャムプを爲さうとする人は、先づ第一に確實性を作り、それからスタイルを完成することに、留意したらよからうと思ひます。先づ練習者はジャムプして轉ばずに行けるやうにせねばならない。此の事は大して六ヶ敷いことではありません。不倒可能性の缺乏は大抵無考へによるものであります。多くのジャムバアは鋭敏に充分考へないし、又空中で思慮分別及び休息を失つて不倒と云ふことを轉倒に代へて終るのであります。

休息、休息をして神經過敏にならないと云ふことは最も

重要なことであります。誰でもジャムバアになる譯に行かない。又同じく一藝術家になる爲にも、己に生れつき一定の素質を具備して居らなければなりません。然し乍ら多くの特質を持つところの人々に於ても亦、成就するまでの道程は甚だしく倦怠に満ちたものであります。

分けても私は、歩みを進めつつある初歩のジャムバアに對して、ジャムピングの精神的方面を考慮して欲しいと望みたい。それと云ふのもつまり、ジャムピングミ云ふものは思慮熟考することなくして、成就することの出来ない機械的の練習でもなく、肉体的の鍛鍊でもないのではありません。私は滑走する前に何時も心の中に、ジャムプの像を畫きまゝす。そして夫れを熟々考へ、自分に與へられたる事情によつて、ジャムピングジャンツエの特質に關して顧慮し、ジャムプを實行し得る様に策戦を立てます。若しも一度ジャムプが所謂精神的に心の中で完全に作り上げらるゝならば他の凡べての事柄は容易に解決がつくのであります。

而して唯、尙大切なことは、踏み切りに際しての張り切つた氣合ひと、エネルギーの緊張と、それに休息と云ふことと、着陸に際しての思慮熟考と云ふことであります。

(二四、九、一一)

(Von Der Stille im Sprunglauf im Skilauder Jahrbuch 1924)
大体是で全譯を終つたこととなります。此一文の中には

私共ジャムプをやるものにとつて、洵に得るところの多きものがあると思ひます。

カルルセン氏自身のスタイルが善いとか悪いとか云ふことは、輕率に私共の様な經驗の浅いものには出来ぬことでありますが、去る二月のインタアナシヨナルスキージャムピングに出場した、スウイスの一流ジャムプアの Hans Eidenbenz 氏は、其大會から得た見聞と智識とによつて一つの報告をして居ります。其報告中に私は次の一文を見出しました。

『今回の大會に私共は他の三名の選手ミジャンプ競技に出場して、現在ノルウエーの一流ジャムプアの飛躍を目撃するここが出来非常に得るところがあつた。ノルウエーのジャムプアである Tullin Thams にしろ、Narve Bonna にしろ、實に立派なスタイルである。吾々が若しも今後彼等と伍して行かんとするならば、宜しく吾々の從來の飛躍スタイルを改善せねばならぬ。カルルセン氏のスタイルは已に舊式である。……』

成る程タームスやボンナのスタイルに比較して考へるならば、或はカルルセン氏のスタイルは已に舊式のものであるかも知れない。そして又兩者のスタイルと云ふものを表面的に表はれた點から比較して見るならば、明かに相違が認められる。然しカルルセン氏のこの一文中に云つて居る

言葉は、氏の氣持をよく表はして居るものであり、且その氣持は恐らくタームスや、ボンナ等の云ひたい氣持と餘り大きな經庭のあるものでないだらうと私には考へられる。

エヴェレストの第四回探檢

十月十七日倫敦合同通信にびよれば英國王立地學協會及山岳會のエヴェレスト探檢は、前號記事の通り、悲しむべきアクシデントありしに屈せず來年その第四回探檢を行ふべきことを公表せる由精進以てその目的の達せられん事を心から祈る。

一九二二年エヴェレスト第二回登攀抄録

赤 松 勳 譯

一九二二年には前後三回に亘つて登攀が企てられ、其の第一回はマロリー、ノートン、サムマブエル等に依つて行はれたが酸素を用ひなかつた爲めに、二六・九八五呎までしか登れなかつた。第二回登攀はフィンチ、ブルース等に依り酸素吸入装置を携帯したのであつたが、五月廿七日二七・三〇〇〇呎の地點まで達し、吸入器等の故障のため中止さるゝに至つた。第三回目はマロリー等に依つて企てらる。次に述べる記事はマロリー自身が筆をとり「The Assault on Mount Everest」に報告せるものである。

フィンチとブルースが第二回登攀から根據地に歸るを待つて直ちに第三回登攀が企てられた。第二回の登攀中私達は暇であつたのでフィンチ等の前途を論議し、その登路の大なりツヂの上に漂ふ雲を眺めた時彼等に如何程の事が遂行せられるかと慮つた。私達は『山嶺は未だ足跡を刻せなかつた』といつて歸つて來たのを別に残念にも驚きもしないのみならず既に彼等の被害に對する手當さへ整つてゐたのであつた。その登攀の不可能の原因は其部隊中に發見された。それは前回の登攀から引續いて従事した六名の中單に一名のみが元氣旺盛であつたのみであつた。サムマブ

エルは他の連中よりも非常に元氣を恢復し、根據地で一夜を明した後第三キャンプまで再び登らうと主張した。他の連中も多少その言に動かされた。指や脚先を凍傷にやられてゐたモールスヘッドは始終惱されてゐたので低い地に移轉するのが最も必要であつた。ノートンも又初めは靴底が凍つたので足が痛いと言へてゐたが矢張凍傷にやられてゐた。それに又心臓を非常に害し最早再登攀の出來ぬ程意氣も力も失はれてゐた。デオフリーブルースも凍傷で歩行困難であつた。それからフィンチも非常に疲勞してはゐたが心臓に故障はなかつたから四、五日たてば出發が出来るこ

思つてゐた。私も亦凍傷にやられ、その中只一指のみが痛み、その第一關節の先端は表面が黒變してゐた。しかし被害は深くはなかつた。私達一同が指の凍傷を其儘にせず治療を施す必要があるといふ意見に對してロングスタツフは生理學上の見地から一度凍傷にかゝつて寒に對して感受性の大きな指は次に非常に害せられ易いプロバビリチーがあり、又私の指はどうしても低地に降りて治療せねばならぬと云つた。が私は指以上に心臟のコンデイションが悪變してゐるを知り意氣消沈し、倦怠を覺へ、又動悸の高まるのを感じた。私は指だけの苦痛なら我慢して出發準備にとりかゝつたのだが心臟を害せられては如何ともすることが出来なかつた。此のことはブルースも了解してゐたので私は止むを得ず希望を放棄した。

私は六月三日に再び診察を受け、脈膊の非常に亂れてゐるが容易に快復することが出来るかと知つてサムマブエル、フィンチと私及びワークフィールドとクラウフォードと共に其日に出發出来る様に準備した。

私達が如何なことをなさんとしてもこれからは天候を待つて行爲せねばならぬことは明である。ロンブク僧院のラマ僧がムンストーンは從來六月十日頃に來るのだと教へて呉れたが一九二一年はそれより遅くまで毎日其の襲來の兆候を見てゐた様に記憶してゐる。

エヴェレストの山姿は夕方雲が飛散するまでは午前九時又は十時以後に稀に眺められた。そして午後になると西部ロンブグの水河より吹いて來る嵐が此の冬間にだんぐりと近づいて來てゐた。キヤムブ附近にはそれ以上の高地では此の吹き荒む嵐は小さな霞や雪に比べてそんなに有害のものでないから此の現象を輕視しながら好天氣の日を待つてゐたが私達は嵐毎により猛猛な襲來が起りはせぬかと不安を懷く様になつた。それでどんな變化が起つても避けられる様にと據るべき地點を平に削つた。

私達は四方壁に圍まれてゐる所謂サンカアから降る雪がテントの傾斜面を美しく變化するのを眺めて安閑と坐つてゐることは到底出来なかつた。終に氣味悪く襲はんとしてゐた西風が猛猛に吹き荒みムンストーンはその猛威をたくましくしたので私達は天候に劇變のあることを知つた。美しいざらざらした雪片が風に依つて周圍の間隙から侵入して床も寢所の上も埋め、朝になると前よりも一層はけしく雪が降り出した。それでフィンチの英斷に依つて退却に決意し使者をブルースのもとに遣して現在の狀態では我等は計畫を中止するに如かずと云はしめた。その日私は此んな場合には何んな行動をとるべきかと色々考へて見た。再び此の場合に善處すべき方法が考究せられたが、それは一言で云はれる誰にも不服のない安全な方法で、即ちムンストーン

が来たから此のシーズンの登攀は終りであるといふ事だつた。

私達は家に歸る時が来た。が私はムンスーンには澤山の種類があつて一定してゐるものではないから、これで直ちに最終の裁決を下すのは尙早いと思はれた。私達の前途には安全な方針はなかつたが最初の重い雪の後には好天氣の日が來るといふ豫想はあながち夢想とは云へなかつた。八日間又は十日間の好天氣があれば尙第三回の登攀を執行することが出来る。私達は明白な危険を冒して猪進することは出來ぬが今退却するは僅かのチャンスが残つてゐても之を利用して探險の効を奏すことは出來ないのである。天候のコンデションが悪いといふ定評のため停滯してゐるよりむしろ登行して豫記しない危険襲來の前又は難事を遂行せんとして招く失策の前に之を知つて停る方がよいと思つた。

降りしきる二日目の夜はあけ、天氣はよくなつたので登攀を決心した。低い重々しい雲は尙も東ロンブク氷河へ沈んで行くが朝早く雪はやみ西の空はすいて來た。前日窓前に飛散する雪を眺めた時は非常に深く積雪してゐる様に思つてゐたがキャムプの周圍の堆石上に積つた雪は案外少なかつた。温風のため雪は溶け又は蒸發して積雪量は一五。五〇〇呎の高所でも僅かに六吋以下であつた。氷河の上も豫想に反して積雪が少なかつたので歩行は非常に樂であつ

た。私達は休息せずに第IIキャンプを通過して新雪の障害を蒙る前に第IIIキャンプに着いた。此處は尙降雪中であつた銀白の光景は喜ばしいものでない。殊に脚に附着する雪は私達の質のよい靴でさへ滲透したので第IIIキャンプに到着する前二時間は非常に疲労を感じた。第IIIキャンプに着いた時はキャンプのテントは安定を失つてゐたが物品は吹き飛ばされてはゐなかつた。テントの中は半ば氷雪で覆はれ貯藏物は埋没して必要品は皆掘出さねばならなかつた。

此處の積雪量は私達の前途に不安を感じしめる程多くはなかつた。大體一五吋から一八吋の深さになる迄活動は徒で苦勞のみ大いのである。そして雪が固るまでは所々に相當な危険が起る。六月六日の朝はまばゆい晴天、キャムプでは未曾有の暖さであつたので雪が非常に早く凝固しキャムプの前の石が現れ出したので私達の意氣は大いに揚つた。

エヰレストの側面は白く、寒く姿を現はしノース。コール(北側の鞍部)から雪雲が起つたが我達が登着くまでは降り續き相にも見えなかつた。今度の第三回登攀には酸素吸入器を使用しやうと決心してゐた。前登攀の際苦痛を蒙つたのを思ひ酸素吸入器がなくては到底新記録を作ること出來ぬのである。最早ノース。コールで第二のキャンプを作つて隊制を編成する様な事は出來ぬ。フィンチから機械的の説明を受けてサムマプエルはオキシゼン。アハラタ

スを使用する必要を痛感し、これがなくては現在までより以上遙かに高く登行することの困難な事を知つた。故にサムマブエルと私とは彼等の體験に依つて大いに貢獻された高所では體内物質の燃焼の増加に依つて普通以上の榮養物の供給が必要であることも彼等の體験に依つて知ることが出来た。それで私達は充分な食物を準備し又二五・〇〇〇呎のキャンプは低すぎるから二六・〇〇〇呎の地點に新しいキャンプを設置しやうと企てた。かくして私達はフィンチ、ブルース等が二一・〇〇〇呎の地點より酸素を使つたに反して私達は二六・〇〇〇呎以上で凡てのシリンドラーを使用しその地點より萬難を排して山巔を窮めんと希つた。ズレヤー教授からその方法は不正當なものとせられたが私達はそれに依つて少なくとも種々な體験を得られると思つた。

さて此の新計劃に依る大なる不安と私達の入夫の生命を如何にして保つかと云ふことであつた。我々は三日間に二六・〇〇〇呎の第五キャンプに到着してから四日目で天氣であつて、この日に入夫を安全にノースコールまで引歸さすことが出来たらさし、それに對しての監督者その他の準備は整へられてゐた。

そこで私達は六月七日に登攀を執行することにした。降雪後のノース・コールへの登行には峠路の下の急峻な傾斜

面中ある一箇所ばかりがアバランシエの危険があると考へたが其所を横斷するに先立つて雪のコンデイションを驗べ危険を避けねばならぬ。恐らく進行を安全とするには一日の活動の結果さうしてもその斜面の下に荷物を残さねばならぬ様になる。そして又その斜面を登りはじめると遭遇する急峻な個所でアバランシエが起り相だが此處は害を被らぬ様に努め、そしてその斜面上の雪の状態を驗べねばならぬ。

斯くしてサムマブエル・クローフオードと私とそれに拾四人の入夫(ワアクヒールドは第三キャンプの物品給與官)の一隊は六月七日午前八時に出發した。前夜は非常に冷たかつたがクラストは私達の重さを支ふことが出来ず一足毎に膝まで没したので、初めの二時間は積雪地を歩いたが午前十時十五分からサムマブエル、私と一人の入夫及びクローフオードとがその順序にロープを結び合つて、雪で覆はれてゐる峻しい氷の斜面にステップを切つた。その時は勿論荷物を持たぬ私達三名が交代にラツセルをやつて入夫達のために踏跡を深く刻んでやつた。

第一回、第二回の登攀に大きい業績をなした。此の三名のものは擧つて *High Point* 高きへ行かうと勇氣を勵まし、又一方には軟雪上の荷物運搬といふ恐ろしい仕事を安心して出来る様にも努力せねばならなかつた。前者の足跡が少し

も見出さなかつたら私達がスロープを斜断した時どこにあるかと一同で考へ、それは雪が非常によく氷に附着してゐるからステツプを切らずに登行する事が出来ると知つた。もしアバランシエが起るならばとそれを誘導する様に雪を掘つて萬般の用意をしたがその試験は安全な結果を生んだ。一度此の危険視された地點を通過して始めて私達は揚々潤歩することが出来た。もし雪が豫期しない方向に落ちたのなら始めから危ぶむ必要はなかつたのだ。これでアバランシエに對しての私達の不安は一掃することが出来た。

深雪上は勿論徐々と歩行せねばならぬのだが我が部隊は非常によく進行し又人夫等も進まんと心得てゐた。サムマベルは非常に長くラツセルをやり、次にクローフオードは短脚といふハンデキャツプのあるに係らず私が交代するまで非常な難雪を進んで行つた。

私はステツプを切るのに非常な努力を要したから以前取つた様な息繼の方法は不適當だと思つた。それで一足から他足に體重を委ねる前部に早く、段々とゆる／＼して息繼するために脚の上昇運動毎に小休みすることが必要だつた。一時三〇分頃に私は停り、間もなく誘導隊と共に人夫等がやつて來た。私達は休息する地點に到達したと喜んでゐるが時間がなかつた爲、サムマベルが再びラツセルをやらうと準備してゐたので私は突進することに決めた。

今や私達は目立つて大きな氷塊の下四〇〇呎、第四キヤンプから六〇〇呎の下に廊下の様になつてゐるなめらかな斜面を歩いてゐた。サムマベルはそこを横断するといふより寧ろ眞上約一〇〇呎まで斜面を進んでゐた時人夫の最後の隊が明かにステツプの中を歩いてゐる筈だつた。周圍は奇らしい光が輝やき、風一つない光景を呈し、又私達の聽覺に傳ふものは只きびしい喘ぎのみであつた。

此の寂寞は突如として破られた。するごい、引きさく様な、はげしい、氣味の悪い音響。それは空砲を發たれたかの様な響でもあつた。又山で未だ經驗したことのない響でもあつた。勿論俗界に蠢動しては毎日の様に聞かされて判つてゐるのではあるが、此時私達悉く何が起るかを直感的に豫知した様に思つた。その瞬間雪表面が私の右側四・五米のところから襲取られ、危険の襲來の急迫してゐるを直覺して痙攣的に二歩進んだ。そこで私は如何んとも逃れる術のない大きな雪崩面に乗せられてゆる／＼下方に運ばれた。

眞逆さまに落下するのを防がんともがいて兎も角雪崩面から轉び出やうと努力した。一、二秒後に雪と共に靜かに滑つてゐるのを知つてあまり危険ではないと思つた。その時腰に結んであるロープが引張られて身體が止まつたので私は雪に埋められた。もう安心と思ひ、曾つて遭遇した連

中の經驗談を想起し、此の機會に泳いで此の環境に逃れんと兩手を高く頭上にあけ一種の游泳法に依つて後方に進んで行つた。

雪に埋められては地上の何事も五官に訴へるものなく、流轉する雪中で無我夢中にもがいたために加速度に依つて落下し始めてからは速度に對する觀念は失なはれてゐたが恐らく二、三秒後であつたらう。容易に水中より浮び出るこゝが出来たが身體は周圍の雪の壓迫が次第に増加して緊め殺されさうであつた。その時アバランシエがやんだのでやつと手が自由となり、又脚もそんなに深く埋められてゐなかつた。

一奮發後靜かな雪面上に茫然自失してしばらく停んでゐたが私の腰にしつかとロープが締められてゐるのに氣付いた。私の次に居る人夫は非常な深所に居る筈だつたが私と同じ様に故障もなく直ちに出て來たのは以外だつた。

私の上でロープしてゐるサムマプエルとクロフオードも又すぐ現はれたが皆同様な經驗を嘗めてゐた。他のものは如何んと見下し、約一五〇呎下に一群の人夫を見出した。其他の者は私達とその人夫達との間に埋まれてゐる筈なので困難とは思つたが掘出さんと降りて行つた。下の人夫達は救助のため上つて來やうともせずじつと立ちどまつてゐた。其等は私達のすぐ後に居た隊であつたのを知つた

紛失した人夫等の彼等の後に居た筈なので恐らくアバランシエの中心地帯にあつて非常に大きな速度で墜落したらしいと思つた。

彼等の無事を希つて降つて行つたとき四人と五人とが各一團になつてロープしてゐた二隊の中四人の一隊がゐるた其の地點には恐ろしい大墜落があつて其逃路は只一箇所のみであつた。氷壁は四〇呎より六〇呎の高さでクレバスが雪で被はれてゐた。彼等の恐懼は實現された。しばらくして一人を發見し、その附近に又一人を見出したがそれは落下のため殺されてゐた。彼等の隊はクレバスの峻しい稜端で苦闘して其處か又はその附近で害せられたらしい。アクシデントの第一回のシヨックで直ちに助け合つて逃れた彼の四人の人夫は此處でクロフオードと共に救助に努め、又私とサムマプエルとはクレバスの中に降りて行つた。

私の引上げたロープの縮輪から他の隊が此處に居ることを知つてアイヌアックスで雪をくだき手で雪を拂つてロープを掘出し一人は死んだ儘で出され、他の一人は眞逆様になつてゐる爲顔が見へなかつたので生死が不明であつたが掘出すには非常に困難であつたが、約四分で掘出したのでやつと蘇生することが出来た。残りの二人の中一人は見出したが死んでゐた。残り一人は最初に稜角を逃出んとした者で確かに雪にひどくやられてゐると思つたから死んでゐる

るものとして救助を放棄した。五人の隊の方は皆掘出しはしたが生きてゐるものは只一人であつた。奇蹟的に助つた二人は第三キャンプまで行くことが出来、次の日には恢復したが残りの七名は殺された。

此の悲劇的災難に依つてエヴェレスト登攀の第三回襲撃は自然とその終局をつけた。

友や兄弟を失つた人達は悲みを傷々しう誇示することもなく働いて呉れた。私達は埋葬するため死者をどこへ運ばうと人夫達に相談したら死者の倒れたところに残して呉れと申出た。私でもこんな場合に遭遇したら矢張そうするのだ。彼等の倒れた雪の中に安置するより外に最善な埋葬があるだらうか。彼等のために大きな堆石が第Ⅲキャンプに建てられた。

此のアクシデントに關して二、三附言したい事がある。それは誰も新雪状態を不注意に接近したと思ふだらうがそれに付いては主にアルプスではあるが雪に關す充分な體験を持つてゐるアルバインクラブの三名は擧つて部隊が安全であると思つてからである。そんななだらかな斜面では雪は崩れぬと考へた。

どんな鹽梅で豫想をうらぎつたか——。通過してゐる傾斜面上に休息してゐるとアバランシエが來ることは明かだししかし氷の急斜面でもよく吸着してゐる雪なら雪崩は起ら

ない。あのアバランシエの地點はステップの線から約一〇〇呎の高所に起つたのである。其處には二つの異なつた雪のコンディションがあつて一方の雪は深く／＼流れんとし他の雪は自由な粉狀に止まらんとしてゐたので此の一方の雪の重量が、表面に變化を與へられた斜面へ他方の雪を壓し落す。ポテンシャル・エナジーがあつたからだらう。もつと經驗と智識とを蓄積したらかゝる場所を避けられるだらう。まだ雪に關する文献は充分でない。コリダーを再び見上げた時外觀に何等の異常が見へぬからあざむかれ易いと思つた。

探險隊の全員が最も遺憾とするところは七名の人夫の死で彼等の印象は到る處深からしめた。

最後にエベレスト山へ我等のキャンプを運ぶ仕事は單に賃金を得やうとする雇傭労働とその趣を異にして實に人夫等は我等の計畫の大なる協力者でもあつた。將又犠牲的任務中に靜かに死にもした。或は忠實に其任務を盡しもした。

正 誤 表 (前號二十八頁)

誤

正

Times

Times

Edit. n

Edition

Base Camp

Base Camp

No. H

No. I

彙報抄録

北海道に於ける

スキー材とその蓄積

一、スキー用材となるべき樹種

A ケヤキ

信越地方にては本材を以て主としてスキー木部を製作するも、此は滑走速度遅く、雪の附着度大にして、歪ひ多く且つ比較的重きを以て、スキー用材としての必要性を満足する特長に乏しく不適當なり。北海道に於ては本樹種を産せず。前記地方より既製品として移入せらるゝも、近年その數を減せり。

B イタヤカイデ

北海道産樹種中スキー用材として最も多く用ひらるゝものにして、歪大なるの欠點あるも此は或程度まで、加工の如何により避け得べし。本材板目を以て製せるものは現下スキー用材として最も主要なるものにして、その蓄積の豊富なると共に將來、本材スキーの製作は漸次研究を積まるゝに到るべし。

C トネリコ

歐米産スキー材は主として、アツシユ、ヒツコリー、バーチの三にして、米國にては稀にマツ、カヘデ類を使用す右のうちアツシユは本邦産トネリコとその材質同一ならず一般に運動具店に於て本邦製品中アツシユと稱せらるゝは實にタモ類製品にして、従つてスキー用材としてもアツシユと呼ばれるゝは、アオダモを用ひたるもの多く。北海道産アオダモは大正十一年―十二年シーズンに於て初めて使用せられたるも、その成績、比較的良好なりき。

D アサダ

大正十二―十三年シーズンに於てスキー材として約一五〇〇臺製作せられたるが、その成績また不可ならず。

E カバ

北海道産カバ類は、フィンランド製スキーに用ひらるゝカバ類と、その材質同一ならずと雖も、シラカンバ、エゾノダケカンバ等又スキー用材として斯業者間に於て研究中なり。

F 其他サクラ等かつて使用せられたことあるも今日行はれず。

二、本道スキー用材蓄積

左に掲ぐる蓄積量は北海道國有林中、特種樹種調査を了

せる箇所のみを總和なり。

イ タヤカヘデ 一、九、三六〇、四九八石

ア チダモ 六一、〇〇四

ア サダ 一、〇三四、二三四

蓄積右の如しと雖も、スキー用材として可用のものは、特に通直なる中齡木を要するに、此等適材は混落林中に散點するものなるを以て、之が撰別に多大の困難を伴ふ事を思ふべし。

三、スキー用材の取引

現在スキー木部用資材は普通木材商に於ては一般に取扱はず。此れ撰別法特異にして、之を製作者より見るも歩止小となるを以て直接伐木業者より購買し、特に自家製作に便宜なる様、伐採せしめたる上、製材せしめ、スキー木部用として巾三寸厚一寸長七尺内外のもの（此のスキー木部一個を製す。二本にて一臺分、此の取材寸法は製作種類により異り、各製作者によりて多少異なる。）一臺分單價を以て取引し屑材は伐木業者によりて処分せらる。スキー製作者間に於て資材の取引なし。但し製品の取引は内地と二三十臺の範圍に於て行はる。

四、製材方法

小供用、大人用に區分し特にジヤムブ用材はその材質を吟味し木取を稍大とす。一般にスキー用材は板目となすを最適とすること明かにして、柁目は一般に歪多きを以て嫌避せらる。

五、北嶺道スキー製作者

姓 名	住 所	最近製作 臺數
芳賀恒太郎	虻田郡東俱知安市街地	四〇〇
梅屋運動具店	小樽市稻穂町	二七〇〇
アサヒヤ商店	同	五〇〇
スタンダード体育會社	札幌市二南條西五丁目	八〇〇
小谷運動具店	札幌市南一條西六丁目	一〇〇〇
小野スキー店	札幌市山鼻町	五〇〇
會田久次郎	夕張郡鹿ノ谷	一五〇〇（アサダ）
松宮商店	旭川市	五〇〇

其他置戸、網走等に於て製作するものもあるも、此等小企模製作者は馬橋製造業者の兼營するものにして製作技術上信用すべきもの尠し。（加納生）

◆ 豫約募集 ◆

慶應義塾体育會山岳部年報

登 高 行

第 五 年
創立十週年紀念號

「山とスキー」誌第四十二號所載の廣告とはその後多少内容体裁を異にすることとなり、刊行期日も従つて延引致すこととなりましたので、改めてまたこゝに廣告致します。

内容と体裁は左の通りに決定致しました。

- 一、涸澤の岩小舎を中心としての穂高連峯(研究) 三田 幸 夫
- 一、穂高岳スキー登山(登山研究記録)
 - 穂高岳の峯名に就て 大島 亮 吉
 - 穂高岳のスキー登路に就て 大島 亮 吉
 - 奥穂高(涸澤登路) 青 木 勝 吉
 - 北穂高(本谷登路) 大島 亮 吉
 - 前穂高(岳川登路) 青 木 勝 吉
- 一、二人者(Die Beiden)(譯章)オスカア・エリツヒ・マイエル 大島 亮 吉
- 一、北海道の夏の山(紀行断片並に感想) 大島 亮 吉
- 一、春の燕と大天井(紀行) 榎 弘
- 一、登山小屋(La gahne) 譯詩 エミール・ゲイヤール
- 一、盤梯と吾妻のスキーの旅(紀行) 漆山巳年夫
- 一、五月の甲斐駒(紀行) 今岡 義 夫
- 一、風景のなかに歩みいるひこ(譯章) シヤール・ゴオ
- 一、冬の藏王(紀行) 西川不二雄
- 一、前夜(Vorabend) 譯章 ハンス・モルゲンターレル
- 一、道(感想) 片 山 弘
- 一、白根より赤石まで(紀行) 相内武千雄
- 一、赤石より遠山川へ(紀行) 田 中 三 晴

- 一、山は如何に余を影響しつゝあるか(再録) 田部重治
- 一、鋸岳の尾根傳ひ(紀行) 中條常七
- 一、山岳部についての回顧と感想 横 有 恒
- 會についての所感 内田節二
- 創立前後の印象 中條常七
- 感想 大島亮吉
- 山岳部室を中心としての回顧 杉田 寧
- 雜 錄 三田 常 夫
- 一、平ヶ岳より日光まで(紀行)
- 一、松尾峠の幻影について

- 一、單獨登山について一言(感想) 大島亮吉
- 一、明神岳(登攀記録) 本郷常幸
- 一、小 槍(登攀記録) 佐藤久一
- 一、屏風岩(登攀記録) 青 木 勝
- 一、前穂高北尾根(登攀記録) 大賀道 辰
- 一、五月の飯豊 岡 本 信 三
- 一、上高地登山小屋日記より
- 一、ハドミントン・スタイル(雜文) 大島亮吉
- 一、年 報 (一九二三・四一九二四・一〇)
- 一、消 息 (鹿子木先生、小寺酉二、中條常七)

體 裁 菊版、紙装、アンカット、全部ポイント組
 ウオーブ・ペーパー、全頁數約三百五十頁
 寫真版十葉、圖版十、地圖二、

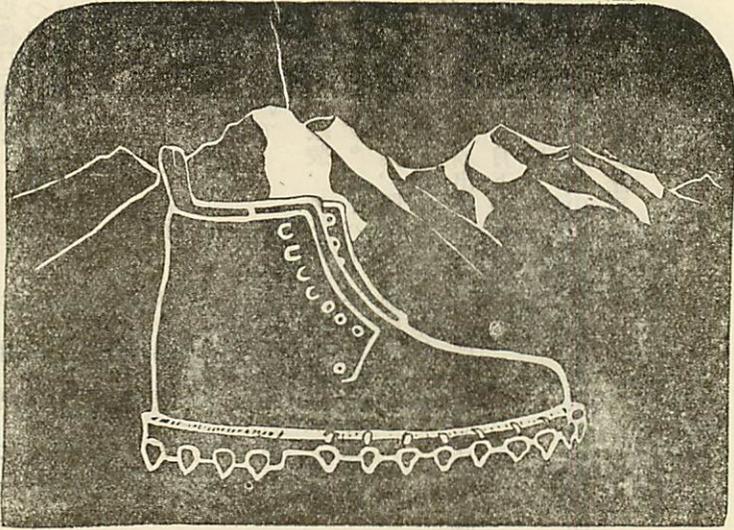
價 格 豫定實價貳圓五拾錢、送料十二錢、
 實價は印刷出來の上ならでは確定せざれば概算の上豫定額を申し受く。

刊 行 期 日 十一月下旬に延引。
 豫約申込期日 十一月十五日迄に延期。

豫約希望の方は右豫定實價送料共に添へ當部編輯委員までお申込下さい。
 振替口座東京六九三二二

東京市芝區三田二丁目 慶應義塾體育會山岳部
 編輯委員

大 島 亮 吉
 三 田 常 夫
 青 木 勝



登山靴とキス靴

東京市本郷区四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七二番
振替東京六一七二番

スキー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

梅屋運動具店

電話八九六番 振替小樽七〇番

◇ 獨逸スキー映畫公開 ◇

「**スキーの驚異**」

第二編・全六卷

於 札幌 金 春 館

十一月十四日兩日

主催 山とスキーの會

映畫器具運來會

電話八八九番 札幌小劇場

北海道帝國大學スキー部編纂

スキー術階梯

(定價金五十錢)

十三年度改定第二版は十二月初旬
發行される豫定であります。

山とスキーの會 發行

定價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいた
しません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその

旨記します。次の御送金あるまで配本を見

合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹

介、縁故の有無にかはらず雑誌の代價は
頂きます。

大正十三年十月三十日印刷

大正十三年十一月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯兼
印刷兼 發行者 佐々木政吉

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 48. Novembro. 1924. Sapporo. Japanujo.

美滿津ノ
ウ#ンター・スポーツ
各種用具



合 名 會 社
美 滿 津 商 店
東 京 ・ 本 郷 ・ 赤 門 前

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十三年十一月三十日印刷
大正十三年十一月一日發行

山ノスキー 第四十三號

定價金參拾錢